ISSN 0387-284 X

読書科学

第44巻 第2号（通巻 第 172 号）平成12年7月1日 発 行（季刊）

原著

第二言語の文章理解過程に及ぼす習熟度の影響　邑本俊亮
ナラトロジーの役割　松本修
能動的触察条件における点字の読み易さの検討　佐藤将朗
待遇表現の適切性判断における地域差、世代差および男女差の影響　宮岡弥生　玉岡賀津雄

翻訳

読みについて(6)　ケン・グッドマン　横田玲子（訳）

172

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

原著

第二言語の文章理解過程に及ぼす習熟度の影響
——文再認課題による実験——　北海道教育大学　邑本俊亮　43

ナラトロジーの役割
——「山月記」を具体例として——　上越教育大学　松本　修　51

能動的触察条件における点字の読み易さの検討
——2綴り文字の認知時間について——　筑波大学　佐藤将朗　58

待遇表現の適切性判断における地域差、世代差および男女差の影響
広島大学　宮岡弥生
広島大学　玉岡賀津雄　63

翻訳

読みについて(6)　アリゾナ大学　ケン・グッドマン
加藤学園暁秀初等学校　横田玲子（訳）　73

日本読書学会役員（1999年4月1日～2003年3月31日）

会　長（理事長）　桑原　隆
副会長（副理事長）　鳴島　甫
常任理事　内田伸子　金子　守　阪本敬彦　佐藤泰正　塚田泰彦　徳田克己　福沢周亮
理　事　有沢俊太郎　池田進一　今井靖親　倉澤栄吉　首藤久義　高木和子　田近洵一　王岡賀津雄　塙　和明　増田信一　湊　吉正　村石昭三　横山範子
監　事　岡田　明　桐原宏行

常任編集委員　鳴島　甫（編集委員長）　池田進一　金子　守　阪本敬彦　塚田泰彦　徳田克己　James M. Furukawa　Donald A. Leton
編集委員　有沢俊太郎　石原敏道　今井靖親　内田伸子　江連　隆　大城宜武　大西道雄　岡田　明　北尾倫彦　小嶋恵子　後藤惣一　小林國雄　鹿内信善　高木和子　府川源一郎　村井万里子　村石昭三　望月善次　山田　純　萬屋秀雄

The Science of Reading, Vol. 44, No. 2 (2000)

第二言語の文章理解過程に及ぼす習熟度の影響
——文再認課題による実験——*

北海道教育大学　邑　本　俊　亮**

問題と目的

我々は，第二言語として英語を学び，英語の文章を読んで理解できるようになる。学びたての時は，英文を読んでもよく理解できない場合が多いが，習熟してくるとある程度の理解が可能となる。未習熟なときの不十分な理解の大きな理由は，語彙的知識や文法的な知識の不足であろう。だが，それ以外にも理由があるのではないだろうか。ある言語に習熟するとは，語彙的知識や文法的知識が増えるということだけではないように思われる。おそらく，文章を理解する過程そのものに何らかの変化が生じるのではないだろうか。本研究は，第二言語の文章理解において，習熟度が文章理解過程にどのような影響を及ぼすのかを実験的に検討するものである。

これまで文章理解に関して多くの研究が行われ，さまざまな知見が得られてきている(たとえば，邑本，1998)。文章理解とは，文章中で述べられている個々の情報に基づいて適切なスキーマを活性化し，直接述べられていない情報を推論によって補って，全体として一貫性のある意味の表象を心の中に作り上げる過程である。そして，この心内に構築される意味の表象は，しばしば，状況モデル（van Dijk & Kintsch, 1983）あるいはメンタルモデル（Johnson-Laird, 1983; Garnham, 1987）と呼ばれている。これらの概念は提唱者によって多少意味が異なっているが，通常は，それを構築する際に読み手は知識に基づいて推論を生成するということが仮定されている（Graesser, Bertus, Magliano, 1995）という点において共通している。よって，本研究においては，文章理解において読み手が構築する状況モデルを，テキスト中に明示された内容だけでなく読み手の推論をも含む表象と定義し，読み手がさまざまな推論をすることで状況モデルが豊かなものになると仮定する。そして，この状況モデルに組み込まれた推論の量や質を調べることで，読み手の文章理解の深さを知ることができると考える。

結局，文章をよく理解できたかどうかは，豊かな状況モデルを構築できたかどうかに依存する。このことは文章が母語であろうが第二言語であろうが同じであろう。言語がどうあれ，文章をよく理解できないというのは，十分な状況モデルが構築できないということを意味する。

習熟度が文章理解過程に何らかの影響を及ぼすならば，理解の結果心内に構築される状況モデルにも違いが現れるはずである。本研究では，第二言語の習熟者と非習熟者とで，文章理解によって構築される状況モデルに何か違いがあるのかどうかという点に注目し，それを実験的に検討する。すでに述べたように，読み手がどれだけ豊かな状況モデルを構築できるかは，理解過程においてどれだけ多くの推論を行うかに依存する。そこで本研究では，文章理解中に生じたであろう推論量を，読解後の文再認課題によって探ることにする。文再認においては，文章中に実際に示された文（これを明示文と呼ぶ）は「あった」，文章内容にそぐわない文（これを不適合文

* The effects of second-language proficiency on text comprehension.
**MURAMOTO, Toshiaki (Hokkaido University of Education)

と呼ぶ）は「なかった」と比較的容易に判断される。しかし，実際には明示されていないが文章内容から推論できる文（これを推論文と呼ぶ）はそれを「なかった」と自信を持って判断することが難しくなる。場合によっては「あった」と誤って判定されてしまうこともあるだろう。このことは，その文が文章理解中に推論され，状況モデルに組み込まれてしまったことを示す傍証となる（Seifert, Robertson, & Black, 1985）。

さらに，どのような種類の推論が生じやすいのか，それが習熟度によってどう異なるのかについても，詳細に検討したい。文章理解中の推論の種類については，多くの研究でさまざまな分類が試みられているが（たとえば，Clark, 1977; Graesser & Kruez, 1993; van den Broek, Fletcher, & Risden, 1993），本研究では，対象とする文章のジャンルを物語に限定することから，物語文において比較的多く生成されると考えられる以下の4種類の推論について具体的に検討することとした。

(1) 目標：登場人物の意図的な行動を動機づけている目標
(2) 行為：登場人物の意図的な行動
(3) 感情：何らかの出来事や状態により登場人物が経験する情緒的反応
(4) 状態：登場人物や事物の特徴

なお，本研究で用いる文再認課題は，言語間再認である。すなわち，被験者が読解する文章は英語であるが，再認の際に提示される文は日本語である。この方法を用いた理由は，以下のとおりである。文章の記憶には表現形態そのものの記憶も存在すると考えられる（たとえば，Kintsch, Welsch, Schmalhofer, & Zimny, 1990；邑本，1994；Murphy & Shapiro, 1994）。したがって，読解中に推論が生成され状況モデルに組み込まれていたとしても，被験者は文章の表現形態の記憶を頼りに，推論文に対して比較的高い確信をもって「なかった」と反応してしまう恐れがある。とりわけ，読解時間の遅い者は，再認課題において表現形態の記憶の影響を強く受ける（邑本，1992）。そのような表現形態の記憶が再認判断に及ぼす影響をできる限り抑えるため，表現形態の異なる言語での再認という手法を用いることにした。

方 法

被験者 北海道教育大学教育学部札幌校の学生58名が実験に参加した。英語関係の講義や演習が多く，日頃英語に関わる機会の多い英語関連学科・課程の学生16名と，英語専攻ではないが英語の1種教員免許を取得予定の4年生1名を“習熟者”とし，その他の日頃あまり英語と関わっていない学生41名を“非習熟者”とした。

材料 3種類の英語の物語文章（*The King and His Daughters, Hammer and Saw, Party Night*）を用いた。*The King and His Daughters*は，Mandler & Johnson（1977）や Graesser, Robertson, & Anderson（1981）などで用いられている物語を一部修正したものである。*Hammer and Saw*は，Stein & Glenn（1979）やTrabasso, Secco, & van den Broek（1984）などで用いられている*Judy's Birthday*という物語を一部修正したものである。*Party Night*は本研究において新たに創作されたものである。これらの英語の文章は，被験者，とりわけ非習熟者の英語能力を想定して，単語もできるだけ平易なものを使用し，難解な表現がないように考慮された。文章の単語数は，*The King and His Daughters*が101語，*Hammer and Saw*が

Table 1 文章例（*The King and His Daughters*）

Once there was a king who had three daughters.
They were very lovely.
One day the three daughters went walking in the woods.
They were enjoying themselves so much
that they forgot the time and stayed too long.
Suddenly a dragon appeared.
The dragon wanted to eat the daughters.
The dragon took them away.
They cried for help.
Three heroes heard their cries.
The heroes came and fought the dragon.
At last the heroes killed the dragon.
Then the heroes returned the daughters to their castle.
When the king heard of the rescue,
he was very pleased.
He rewarded the heroes.

155語，*Party Night*が142語であった。文章の提示は，後に述べる方法で一文ずつ行われることになるが，各文章の文の数は，順に16文，18文，19文であった。文章例として，*The King and His Daughters*をTable 1に示す。

これらの3つの文章に対して，それぞれ12文の日本語による再認文を作成した。12文の内訳は，4文が実際に文章中に出てきた文（明示文），4文が文章中には出てこなかったが文章の内容から推論可能な文（推論文），そして，残りの4文が文章内容にそぐわない文（不適合文）である。推論文の4文については，その内容が，登場人物の目標（目標），登場人物の行為（行為），登場人物の情緒的反応（感情），登場人物や事物の特徴（状態）の4種類になるように作成した。この4種類の推論文の再認成績を比較するためである。なお，明示文および不適合文の各4文についても，内容をこの4種類に統一した。再認文リストの例（*The King and His Daughters*に対する再認文リスト）をTable 2に示す。

Table 2　再認文リストの例(*The King and His Daughters*)

明示文
・ドラゴンは娘たちを食べようと思った。
・英雄たちがやってきてドラゴンと戦った。
・王様はたいへん喜んだ。
・3人の娘たちはとても愛らしかった。
推論文
・英雄たちは娘たちを助け出そうと思った。（目標）
・ドラゴンは娘たちをつかまえた。（行為）
・3人の娘たちはとてもおびえていた。（感情）
・英雄たちは勇敢であった。（状態）
不適合文
・英雄たちはドラゴンと仲良くなりたかった。
・王様はドラゴンを追いかけた。
・英雄たちは突然悲しくなった。
・ドラゴンは目が見えなかった。

注）カッコ内は推論文の種類を示す。

装置　材料を提示する手段として，パーソナルコンピュータ3台（NEC PC-9821Ce2が2台と，NEC PC-9801BXにディスプレイSANYO CMT-C14U2Dを接続したものが1台）が使用された。

文章提示方法　本研究における文章提示方法は以下のとおりである。まず，画面上方に文章のタイトルが提示される。2秒後に，画面左方に右向きの矢印（→）が表れる。この矢印は，文が提示される場所を示すものである。そして，被験者がスペースキーを押すと，画面上方のタイトルが消え，すぐに矢印の行に文章の最初の一文が表れる。被験者は，文を読み終えたら，再びスペースキーを押す。すると，文が消え，同じ場所に次の文が提示される。この操作を文章の最後の文を読み終えるまで行うことになる。つまり，被験者は，一文ずつ自分のペースで読み進めていくことになる（ただし，すでに読み終えた文を前に戻って読むことはできない）。このとき，被験者が各文を読むのにかかる時間がミリ秒単位で測定される。なお，このことは被験者には知らされない。

手続き　実験は3名または2名同時に行われた。被験者は，それぞれディスプレイの前に座り，そこに提示される教示文を読んだ。教示では，被験者に文章の提示方法の説明があり，実験に先立って文章を読む練習が行われることが告げられた。文章を読む練習を行った後，実験が開始された。被験者は最初の文章を読み，文章についての簡単な質問に回答した。質問は，文章の理解感（内容をどの程度理解できたと感じているか），おもしろさ，読みやすさ，読解時の緊張度を尋ねるものであった。各質問に対する回答は，キーボード上の特定のキーを操作して，画面に提示される5段階の尺度の適当な箇所にカーソルを移動するという方法が採られた。以上の手続きが，3つの文章に対して繰り返された。3つの文章の提示順は，被験者間でカウンターバランスされた。

3つの文章の読解が終わると，続いて再認課題が行われた。被験者は文章読解の後に再認課題が行われることを事前に知らされてはいなかった。被験者は，ディスプレイに提示された日本語の文が先ほど読んだ文章中に英語の表現として実際に存在していたかどうかを判定した。判定に際しては，物語の状況に当てはまるかどうかではなく，文章中に実際に記述されていたかどうかを判断するように強調された。被験者はまず，「あった」か「な

かった」かを，マウスの左右のボタンのどちらかを押すことで判断した。左ボタンが「あった」，右ボタンが「なかった」であった。その後，その判断の確信度を，「全く確信がない」から「非常に確信がある」までの4段階で回答した。回答は，キーボード上の特定のキーを操作して，4段階の尺度の適当な箇所にカーソルを移動するという方法が採られた。12文の再認文の提示順序はランダムであった。再認課題は，3種類の英語の文章すべてに対して，それらが提示された順に行われた。

結 果

実験装置のトラブルにより，非習熟者1名が分析から除外された。

(1) 読解時間

被験者ごとに，各文章に対して一文あたりの読解時間を求めた。Table 3に，各文章に対する一文あたりの読解時間の平均および標準偏差を，習熟度別に示す。Clark (1973) の2種類のF値 (F_1, F_2) により，2 (習熟度) × 3 (文章材料) の2要因分散分析を行ったところ，習熟度の主効果が有意であったが ($F_1(1, 55)=35.66$, $p<.001$; $F_2(1, 50)=171.28$, $p<.001$)，文章材料の主効果および交互作用は，F_1についてのみ有意でF_2については有意ではなかった (主効果：$F_1(2, 110)=26.02$, $p<.001$; $F_2(2, 50)=1.41$, *n.s.*, 交互作用：$F_1(2, 110)=4.77$, $p<.05$; $F_2(2, 50)=1.91$, *n.s.*)。したがって，習熟者のほうが非習熟者に比べて読解時間が短かったと言える。

Table 3 各文章に対する一文あたりの読解時間の平均および標準偏差

	N	文章		
		The King and His Daughters	*Hammer and Saw*	*Party Night*
習熟者	17	2691 (513)	3131 (738)	3237 (623)
非習熟者	40	4344 (1279)	5473 (1603)	5072 (1245)

注) 単位はミリ秒。カッコ内は標準偏差。

(2) 理解感自己評定値

文章読解直後に行った質問項目の中に読み手の理解感を自己評定するものがあった。その評定について，全く理解できなかったを1，よく理解できたを5として得点化した。Table 4に，各文章に対する理解感自己評定値の平均および標準偏差を，習熟度別に示す。2 (習熟度) × 3 (文章材料) の2要因分散分析の結果，習熟度の主効果 ($F(1, 55)=18.56$, $p<.001$) および文章材料の主効果 ($F(2, 110)=7.91$, $p<.01$) が有意であった。交互作用は有意ではなかった。文章材料による理解感の差はあるものの，いずれの文章においても習熟者のほうが非習熟者に比べて理解感が高いことがわかる。

Table 4 各文章に対する理解感自己評定値の平均および標準偏差

	N	文章		
		The King and His Daughters	*Hammer and Saw*	*Party Night*
習熟者	17	4.9 (0.2)	4.6 (0.5)	5.0 (0.0)
非習熟者	40	4.3 (0.8)	3.9 (1.0)	4.5 (0.7)

注) 最大値は5，最小値は1。カッコ内は標準偏差。

(3) 再認確信度評定値

再認課題における被験者の反応に対し，0点から6点の間で得点化を行った。「あった」と反応したものについては，3点から6点の間で，確信度が高くなるほど得点が高くなるように，「なかった」と反応したものについては，0点から3点の間で，確信度が高くなるほど得点が低くなるように，それぞれ得点を与えた。したがって，高い確信をもって「あった」と判断した場合は6点となり，高い確信をもって「なかった」と判断した場合は0点となる。また，「あった」と反応しようが「なかった」と反応しようが，確信が全くない場合は3点となる。この値を再認確信度評定値と呼ぶことにする。Figure 1に，再認文の種類 (明示文，推論文，不適合文) ごとの平均再認確信度評定値を，習熟度別に示す。

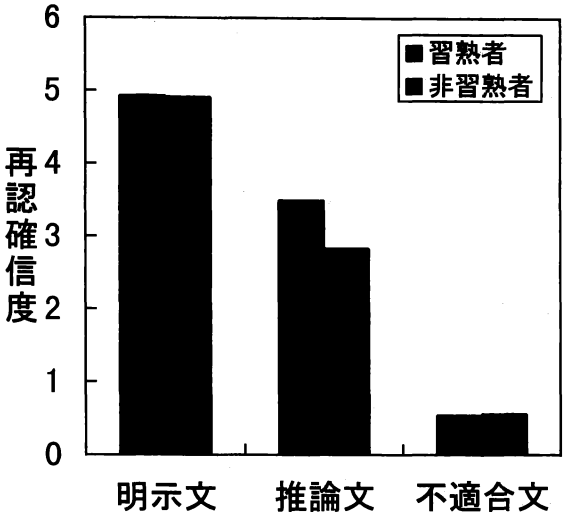


Figure 1　3種類の再認文に対する習熟度別平均再認確信度。

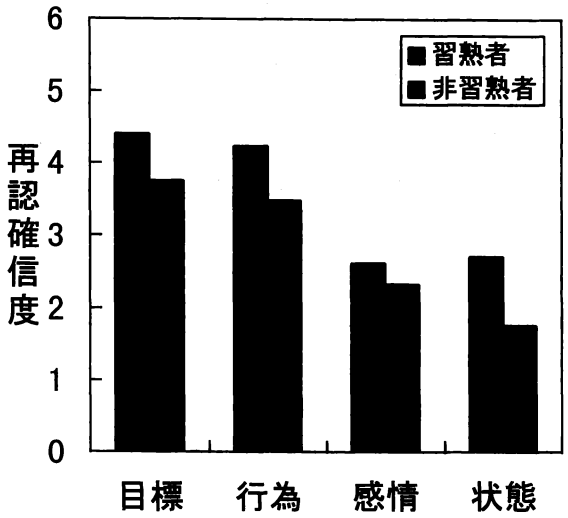


Figure 2　4種類の推論文に対する習熟度別平均再認確信度。

2（習熟度）×3（再認文の種類）の2要因分散分析の結果，交互作用が有意であったので（$F_1(2, 110)=3.90$, $p<.05$；$F_2(2, 33)=8.21$, $p<.01$），単純主効果の検定とTukey法による多重比較を行った。その結果，習熟度ごとの単純主効果の検定では，習熟度の高低に関わらず，再認文の種類の単純主効果が有意であり（習熟者：$F_1(2, 110)=269.64$, $p<.001$；$F_2(2, 66)=222.93$, $p<.001$，非習熟者：$F_1(2, 110)=254.99$, $p<.001$；$F_2(2, 66)=210.82$, $p<.001$），すべての種類間で再認確信度に有意差が認められた。一方，再認文の種類ごとの単純主効果の検定では，明示文と不適合文においては習熟度の違いによる差は認められなかったが，推論文においては習熟者のほうが非習熟者に比べて，再認確信度評定値が有意に高いこと明らかとなった（$F_1(1, 165)=10.25$, $p<.01$；$F_2(1, 33)=49.18$, $p<.001$）。

(4)　推論文の種類ごとの再認確信度評定値

推論文の種類によって，その再認確信度評定値に何らかの違いが見いだせるのかどうか，また，(3)で明らかになった読み手の習熟度の違いによる再認確信度評定値の差が，推論文の種類ごとに異なるのかどうかを調べるために，推論文だけを取り上げて分析を行った。Figure 2に，4種類の推論文の平均再認確信度評定値を，習熟度別に示す。2（習熟度）×4（推論文の種類）の2要因分散分析の結果，習熟度の主効果（$F_1(1, 55)=5.20$, $p<.05$；$F_2(1, 8)=24.75$, $p<.01$）および推論文の種類の主効果（$F_1(3, 165)=37.36$, $p<.001$；$F_2(3, 8)=18.79$, $p<.001$）がともに有意であったが，交互作用は有意ではなかった（$F_1(3, 165)=0.82$, *n.s.*；$F_2(3, 8)=1.11$, *n.s.*）。交互作用が有意ではなかったので，習熟者のほうが非習熟者に比べて再認確信度が高いという傾向は，4種類すべての推論文において認められるものであったと言える。一方，推論文の種類の主効果に関しては，Tukey法による多重比較の結果，「目標」と「行為」のそれぞれが「感情」および「状態」に比べて有意に高い再認確信度評定値であることが分かった（すべて$p<.01$）。「目標」と「行為」の間，および「感情」と「状態」の間の差は，いずれも有意ではなかった。

考　察

読解時間と理解感自己評定値の結果より，習熟者は，文章の読解が非習熟者より速く，理解感も高いのに対して，非習熟者は，時間をかけて文章を読解するが，その

わりに理解感は習熟者ほどは高くないことが分かった。

再認課題の結果からは，明示文と不適合文に対する再認確信度評定値は習熟度による違いが認められないが，推論文に対する再認確信度評定値は習熟者のほうが高いことが明らかとなった。これは，習熟者が実際には明示されていなかった推論文を誤再認する傾向が強いことを意味している。このことから，習熟者は非習熟者よりも，読解中にそのような推論を実際に行い，それを状況モデル中に組み込んだ可能性が高いことが示唆される。

文章中に明示された内容については，習熟者も非習熟者も同様に高い再認確信度評定値である。したがって，両者の状況モデルを比べた場合，明示された内容に基づいて構築された部分はほぼ同じと考えられる。しかし，習熟者のほうが，より多くの推論を行い，推論によって補われた部分が非習熟者よりも多い。その分だけより豊かな状況モデルの構築が可能となり，より深い理解を達成できたものと思われる。

では，なぜ習熟者は，非習熟者に比べて読解時間が短いにもかかわらず，より多くの推論を行うことができるのであろうか。逆に言えば，非習熟者は時間をかけて読んでいるが，相対的に推論量が少ないのはなぜだろう。彼らは何に時間を費やしているのだろう。単語の検索や構文の解析に手間取ったことも考えられる。難解な単語が含まれていたり複雑な構文であったりした場合はそうであろう。だが，本研究で用いた材料は，大学生には比較的平易な単語，平易な構文の文章材料であった。語彙的あるいは統語的知識の不足による影響はさほど大きくはなかったのではないだろうか。ただ，一部の被験者，いくつかの文でそのようなことが生じた可能性は，完全には否定できない。

本研究の結果は，言語的な知識量の違いというよりも，むしろ，習熟者と非習熟者とでは文章を処理する過程がそもそも違っており，その影響が反映されたと考えたほうが良いのではないだろうか。単語レベルの処理に関しては，習熟度によって2言語間の語彙と概念の表象システムの構造が異なり，単語処理過程に違いが生じることが報告されている（Chen & Leung, 1989；川上，1994）。それらによれば，2言語間の語彙と概念の表象として，各言語に特有の2つの語彙システムと言語に依存しない単一の概念システムが仮定されている。そして，第二言語の習熟度が低い場合は，第二言語の語彙システムは第一言語の語彙システムと連結しているが，概念システムとは直接連結していない。そのため，概念システムへは，第一言語の語彙システムを介さなければアクセスできない（語彙連結モデル）。それに対して，第二言語の習熟度が高い場合は，第二言語の語彙システムは第一言語の語彙システムとでなく，概念システムと連結している。そのため，概念システムへは第一言語を介さずに直接アクセスが可能である（概念媒介モデル）。この考え方に従えば，第二言語の単語が提示されたとき，習熟者はその意味を直接引き出しうるのに対して，非習熟者の場合は第一言語への翻訳過程を経てはじめて意味がわかることになる。このことは，単語処理だけではなく文の意味処理を行う場合にも当てはまるかもしれない。すなわち，第二言語の文を，習熟者は直接“理解”しているのに対し，非習熟者は一旦母語に翻訳して“理解”しているのかもしれない。もし，このような処理過程の違いが存在するならば，非習熟者は読解に時間がかかるのは当然であろう。だがそれだけでは，彼らの推論量が習熟者に比べて相対的に少ないということの理由にはならない。

非習熟者の推論量が少ない理由を考える際には，人間の情報処理が容量の限られた作動記憶の中で行われるということを思い起こす必要があるだろう。もし，非習熟者が第二言語の文章を逐一母語に翻訳して理解しているならば，随時生じるそのような付加的な処理のために作動記憶の容量の一部が占有されてしまうことが考えられる。いわば，母語の言語システムが常駐しているといった状態である。そのため，作動記憶の容量が不足し，文章に述べられている事以外の理解，すなわち推論を十分に行えなくなってしまったと考えるのが妥当ではないだろうか。逆に考えれば，第二言語に習熟し，母語の言語システムの助けを必要としなくなれば，作動記憶の使え

る容量が多くなり，自然と多くの推論が可能となる，ということかもしれない。

このことは，熟達度の低い外国語を使用している最中は思考力の一時的な低下が生じるという報告（Takano & Noda, 1993）と一致する。Takano & Noda（1993）はこの現象を，言語課題と非言語的な思考課題とを同時に遂行させる実験によって検証している。本研究はそのような思考力の低下が第二言語の文章理解過程においても生じており，それは生成される推論量の減少となって現れてくることを示したものと言えるだろう。

本研究では，推論の種類によって再認成績に違いが認められた。「目標」と「行為」が「感情」と「状態」よりも誤再認されやすかった。「目標」と「行為」は，文章中の個々の情報を連結する上で必要な橋渡し推論（bridging inferences）となっている場合が多い。たとえば，「英雄たちが娘の悲鳴を聞いた」後，「かけつけてきてドラゴンと戦った」のはなぜかを理解するためには，「英雄たちは娘たちを助け出そうと思った」という「目標」の推論をしなければならない。また，「突然ドラゴンが現れ」，「娘たちを連れ去った」際には，当然「ドラゴンは娘たちをつかまえた」（「行為」の推論）ことが前提となる。それに対して，「感情」と「状態」は，個々の情報の連結にはあまり関係のない精緻化推論（elaborative inferences）である場合が多い。ドラゴンを前にして「３人の娘たちはとてもおびえていた」ことや，ドラゴンと戦った「英雄たちは勇敢であった」ことは，物語の状況をより精緻化する推論情報と言えよう。このような推論としての役割の違いが，再認成績に反映されたのではないかと推察される。

しかし，いずれの種類の推論文においても，習熟者の再認確信度評定値が非習熟者のそれよりも高く，この傾向は推論文の種類によって異なってはいなかった。つまり，ある種の推論文は再認成績が習熟度によって異なり，ある種の推論文は習熟度による差がない，というような結果は見いだせなかった。したがって，推論の種類に関係なく，非習熟者は習熟者に比べて推論量が少ないことが示唆される。しかしながら，本研究で対象とした推論の種類は物語の理解において生じ得るさまざまな推論のごく一部であり，本研究で対象としなかった種類の推論の中には，習熟度の違いによる影響を受けないような推論があるかもしれない。また，本研究における被験者は，いずれも大学生であったが，彼らよりもさらに習熟した読み手や，逆にもっと習熟度の低い初学者との比較がなされたならば，習熟度の影響を受けないものや，大きく受けるものが明らかになるかもしれない。

引用文献

CHEN, H.–C., & Leung, Y.–S. (1989). Patterns of lexical processing in a nonnative language. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 15, 316–325.

CLARK, H.H. (1973). The language–as–fixed–effect fallacy: A critique of language statistics in psychological research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 12, 335–359.

CLARK, H.H. (1977). Inferences in comprehension. In D. LaBerge & S.J. Samuels (Eds.), *Basic processes in reading: Perception and comprehension.* Hillsdale, NJ: Erlbaum.

GARNHAM, A. (1987). *Mental models as representations of discourse and text.* Chichester: Ellis Horwood.

GRAESSER, A.C., BERTUS, E.L., & MAGLIANO, J.P. (1995). Inference generation during the comprehension of narrative text. In R.F. Lorch & E.J. O'Brien (Eds.), *Sources of coherence in reading.* Hillsdale, NJ: Erlbaum.

GRAESSER, A.C., & KRUEZ, R.J. (1993). A theory of inference generation during text comprehension. *Discourse Processes*, 16, 145–160.

GRAESSER, A.C., ROBERTSON, S.P., & ANDERSON, P. A. (1981). Incorporating inferences in narrative representations: A study of how and why. *Cognitive Psychology*, 13, 1–26.

JOHNSON–LAIRD, P.N. (1983). *Mental models: Towards*

a cognitive science of language, inferences, and consciousness. Cambridge: Cambridge University Press.

川上綾子 (1994). 語彙—概念関係における第二言語の習熟度の影響 心理学研究, 64, 426-433.

KINTSCH, W., WELSCH, D., SCHMALHOFER, F., & ZIMNY, S. (1990). Sentence memory: A theoretical analysis. *Journal of Memory and Language*, 29, 133-159.

MANDLER, J.M., & JOHNSON, N.S. (1977). Remembrance of things parsed: Story structure and recall. *Cognitive Psychology*, 9, 111-151.

邑本俊亮 (1992). 文章の読解時間の個人差と文の再認記憶 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 325.

邑本俊亮 (1994). 物語文章における発話行為を表す文の表現形態がその再認記憶に及ぼす効果 心理学研究, 65, 47-53.

邑本俊亮 (1998). 文章理解についての認知心理学的研究——記憶と要約に関する実験と理解過程のモデル化—— 風間書房

MURPHY, G.L., & SHAPIRO, A.M. (1994). Forgetting of verbatim information in discourse. *Memory & Cognition*, 22, 85-94.

SEIFERT, C.M, ROBERTSON, S.R., & BLACK, J.B. (1985). Types of inferences generated during reading. *Journal of Memory and Language*, 24, 405-422.

STEIN, N.L., & GLENN, C.G. (1979). An analysis of story comprehension in elementary school children. In R.O. Freedle (Ed.), *New directions in discourse processing, Vol*. 2. Norwood, NJ: Ablex.

TAKANO, Y. & NODA, A. (1993). A temporary decline of thinking ability during foreign language processing. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 24, 445-462.

TRABASSO, T., SECCO, T., & VAN DEN BROEK, P. (1984). Causal cohesion and story coherence. In H. Mandl, N.L. Stein, & T. Trabasso (Eds.), *Learning and comprehension of text.* Hillsdale, NJ: Erlbaum.

VAN DEN BROEK, P., FLETCHER, C.R., & RISDEN, K. (1993). Investigations of inferential processing in reading: A theoretical and methodological integration. *Discourse Processes*, 16, 169-180.

VAN DIJK T.A., & KINTSCH, W. (1983). *Strategies of discourse comprehension.* New York: Academic Press.

SUMMARY

The purpose of this study was to investigate the effects of proficiency in a second language on text-comprehension processes. The subjects were fifty-eight Japanese college students. Seventeen of them were more proficient and 41 were less proficient in English. They read three English narrative texts sentence by sentence on a computer monitor and were then tested with 12 Japanese sentences for their recognition of each text. The test sentences included four direct translations (explicit sentences), four inferable sentences, and four completely incorrect or illogical statements. They were also asked to give their confidence in each of their responses on a scale of one to four.

The results showed that the reading times of the more proficient students were shorter and their sense-of-understanding ratings were higher than those of the less-proficient students. The results also showed that the inferable sentences were incorrectly recognized with higher confidence by the more proficient group than the less proficient group. It was suggested that proficient readers generated more inferences and constructed a more elaborate situation model in a shorter reading time. The differences in second-language text processing between proficient and non-proficient readers were discussed on the basis of working-memory capacity.

The Science of Reading, Vol. 44, No. 2 (2000)

ナラトロジーの役割
——「山月記」を具体例として——*

上越教育大学　松　本　　修**

1．問題の所在

国語科教育研究におけるナラトロジーの導入にまつわる問題点については，幾度か発言してきた[1]。そのうち，「「ごんぎつね」における自由間接話法」[2]においては，自由間接話法という範疇の適用に関わって，先行する分析を踏まえ，その適用が解釈の根拠として自由間接話法という範疇を用いていることの問題を指摘し，むしろこうした範疇および語りに関わる分析は，解釈の対立を説明し，解釈を交流するための媒介として用いられるべきであると主張した。本稿においては，高等学校の国語科で安定教材といわれる「山月記」をとりあげ，その「語り手」について検討を行いつつ，文学教育におけるナラトロジーの導入をめぐる問題点について考察を進めたい。

2．「山月記」の語り手

「山月記」の語り手に対する関心が近年高まっている。これは，語り手像の把握が，テクストの読みと密接に関わることが自覚化されてきつつあるためだと思われる。たとえば，田中実は次のように述べている。

『山月記』という小説を読む際，私が注意すべきだと思うのは，全体の状況（文脈）のなかで主人公の李徴をその外部から捉えて説明する（甲）の文脈と，李徴の肉声でみずから過去の自己を分析的に省みる（乙）の文脈との，この二つの文脈から成立していることである。（甲）と（乙）とは形の上では特にその違いがなく，（（乙）も鍵括弧がない），最終的にはどちらも読者に向けて語られているにしても，この小説全体の〈語り手〉が直接読者に向けて語っているのとは，作中のなかでその文脈が全く異なるからである[3]。

渥美孝子は，近年の〈語り手〉に着目した「山月記」論の系譜を整理している[4]が，個々の論者がどのようにして〈語り手〉像を決定しているかという手続きにまでは踏み込んでいない。文学の論考においては，手続きが明示されないという事情も作用していよう。田中実論には，〈語り手〉の認定にかかわる手続きが一部提示されている（引用中の「鍵括弧がない」といった言及）ので，その手続きに沿いながら，「山月記」の語り手像を検討する。

田中は，〈語り手〉の変容を論じる中で，次のように述べている。

『山月記』の冒頭の〈語り手〉（甲）は当初明確に自立し，袁傪と李徴の出会いも最初は鍵括弧が付いて，確固としていた。それが「袁傪は恐怖を忘れ，馬から下りて叢に近づき，懐かしげに久闊を叙した。そして，何故叢から出て来ないのかと問うた。……」と語っていった後，直接話法は消え，長い李徴の告白が始まって〈語り手〉は変容していく。（甲）の〈語り手〉は，（乙）が始まると，部分的には，「李徴の声は併し忽ち先刻の自嘲的な調子に戻つて，言つた。」という相対化をいくばくかなしてはいるものの，（乙）の裏側，

* On the narration in the story "Sangetsuki."
**MATSUMOTO, Osamu (Joetsu University of Education)

背後に潜んで表層から後退する。例えば『山月記』の結末近く，以下のように続く。

本当は，先づ，此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ，己が人間だつたなら。飢ゑ凍ゑようとする妻子のことよりも，己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男だから，こんな獣に身を堕すのだ。

さうして，附加へて言ふことに，袁傪が嶺南からの帰途には決して此の途を通らないで欲しい，（中略）以て，再び此処を過ぎて自分に会はうとの気持ちを君に起させない為であると。

傍線部は李徴の肉声＝（乙）の〈ことば〉である。その後行がえになってはいるが，「さうして，附加へて言ふことに」という地の文と，李徴の告白の文とは連続し，さらに「袁傪が嶺南からの帰途には決して……」という文とそのまま連続して，断層を感じさせずに，主体の異なる，（甲）（乙）の二つの文脈（コンテクスト）は一つになって語られている。すなわち，これらは決して単に李徴の〈ことば〉から鍵括弧がはずされたということに留まるのではなく，地の文（〈語り手〉）と李徴の告白とが連続して延長し，混在していることを示している。直接話法であれば，「袁傪が」という言い方はしない。また，「君に起させない為であると。」という文の結びを「と」で終わらせたのは漢文体のためであるが，ここでは，〈語り手〉の〈語り〉が李徴の告白にほとんど一体化していく効果を齎している[5]。

田中の言う語り手（甲）は，袁傪および李徴のせりふを鉤括弧にくくられた直接話法によって提示するゆえに，「明確に自立し」，「確固としていた」と論じられる。たしかに，「あぶない所だつた」「其の声は，我が友，李徴子ではないか？」「如何にも自分は隴西の李徴である」という三つのせりふは，鉤括弧にくくられており，以降の袁傪，李徴のせりふが鉤括弧にくくられていないのと違いを見せている。しかし，その違いだけで，その相違を決定的なものと判断できるだろうか。

田中の指摘する境界以降の袁傪および李徴のせりふは次のように提示されている。

そして，何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の声が答へて言ふ。自分は今や異類の身となつてゐる。どうして，おめおめと故人（とも）の前にあさましい姿をさらせようか。且つ又，自分が姿を現せば，必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決まつてゐるからだ。しかし，今，図らずも…[6]

袁傪のせりふは読点の後に始まり，「と」という引用表示に受け止められている。また，李徴のせりふは，「答へて言ふ。」という引用表示の後に続き，「自分」という一人称を起点として，「君」という二人称，「今」という直示的な時間表現によって，直接話法としての要件を満たしている。鉤括弧の不在だけでは十分な判断の指標とはならない。田中の指摘する境界のあとも，せりふと呼べるものには鉤括弧に代わる引用表示が常に存在している（「草中の声は次のやうに語つた。」「声は続けて言ふ。」「旧詩を吐き終つた李徴の声は，突然調子を変へ，自らを嘲るが如くに言つた。」「その詩に言ふ。」「李徴の声は再び続ける。」）。語り手（甲）は，李徴の告白の合間に姿をあらわし，袁傪や供の者の様子，情景を描写して報告しており，そうした部分と李徴の告白は，段落を改めることによって切断されていて違いは明白である。語り手（甲）から（乙）への変化とは，むしろ李徴のせりふの量的な格差と，語り手の知覚の起点としての「視点」の変化によって生じたものである。

やや問題になりそうなのが，次のような表現である。

最早，別れを告げねばならぬ。酔はねばならぬ時が，（虎に還らねばならぬ時が）近づいたから，と，李徴の声が言つた。だが，お別れする前にもう一つ頼みがある。

この部分は，直前の段落における情景描写が「漸く四辺（あたり）の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて，何処からか，暁角が哀しげに響き始めた。」となっていて，それまでの告白部分とは異なり，先行する引用表示がない。そのかわりとして，「と，李徴の声が言つた。」という引用表示が間に挟まれているのである。しかも，この引用表示

は，英文の直接話法の形と同様，後続する文にとっても引用表示となっている。「(虎に還らねばならぬときが)」という括弧付きのことばを全体の語り手の言葉と判断する場合には，この部分は描出表現として把握されることになるが，むしろ李徴の口調の変化を表示したものと見ることもできよう。後続する文は，いずれも「我が妻子」「おれ」「自分」というような人物呼称，文末の現在形などの指標に見るとおり，直接話法としての条件を備えている。

この段落において，それまでの告白の引用とは異なる形が用いられたのは，李徴の告白が終盤に至り，田中の言うところの境界部分（李徴の告白の始まりの部分）に照応する部分になるからであろう。

3．話法と語り手

田中の指摘する結末近くの部分は，やや微妙な問題を含んでいる。田中は，「「さうして，附加へて言ふことに」という地の文と，李徴の告白の文とは連続し，さらに「袁傪が嶺南からの帰途には決して……」という文とそのまま連続して，断層を感じさせずに，主体の異なる，（甲）（乙）の二つの文脈（コンテクスト）は一つになって語られている。」と指摘しているが，これは話法の問題として把握されよう。袁傪という氏名による呼称が，直接話法で用いられるべき二人称と対立し，一方，「自分」という一人称が直接話法の指標となるため，田中のような指摘がなされている。この部分は，確かにその点で描出表現と判断される条件を備えており，田中の読みの根拠となりえている。ただ，全体としては，「附加えて言ふことに，」という先行する引用表示，「君に起こさせない為であると。」という後続する引用表示があり，「袁傪が嶺南からの帰途」という表現のみが描出表現の指標となる。

田中は，「「君に起させない為であると。」という文の結びを「と」で終わらせたのは漢文体のためであるが，ここでは，〈語り手〉の〈語り〉が李徴の告白にほとんど一体化していく効果を齎している。」と論じているが，この指摘は理解できない。漢文体という指摘は，「と」の引用表示としての性格を認めず，この文全体の描出表現としての性格を言うべく行われているのであろうが，漢文では「曰く……」という形で引用が表示されるのが常であり，漢文調を意識すれば，ここでもその引用形式（言ふことに―と）を意識化させることになる。そして，「袁傪が嶺南からの帰途」という表現の三人称性の印象を後退させて，描出表現の指標としての性格を弱めることにもなる。告白の終わりにあたって改まったおごそかな口調をとったと解せば，相手の行いを三人称的に言うこともありえないことではない。

「山月記」の話法をめぐっては，既に三谷邦明による次のような指摘がある。

> 引用文中で傍線を付けた言説が，自由間接言説である。自由間接言説というのは，語り手と登場人物の二人の声が聞こえてくる，重層的な言説を意味している。例えば，「躍り出た」「隠れた」と判断しているのは誰であろうか。語り手が再現した地の文として読めると共に，登場人物袁傪が認知した言説とも読むことができるのである[7]。

引用されている表現から問題になる三つの箇所を部分的に示すと以下のとおりである。(傍線は三谷による。引用は三省堂の教科書によっている。)

> 残月の光を頼りに林中の草地を通っていった時，はたして一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は，あわや袁傪に躍りかかるかと見えたが，たちまち身を翻して，もとの叢に隠れた。叢の中から人間の声で「危ないところだった」と繰り返しつぶやくのが聞こえた。
>
> 叢の中からはしばらく返事がなかった。しのび泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあって低い声が答えた。
>
> 李徴の声が答えて言う。

この自由間接言説という概念の範疇およびその分析への応用には問題がある。この点については既に論じた[8]が，改めて確認しておきたい。

袁傪の認知がそのまま袁傪の声で報告されているのか，

袁傪に近い視点から語り手の声で袁傪の認知に近い内容が報告されているのかは，曖昧ではあるが，明確な描出表現が見られない限り，袁傪の認知であると判断することはむずかしい。

「残月の光を……」の一文を，三谷は「躍り出た」という部分に着目して，袁傪の認知を示すものと考えているようだが，ここはむしろ「通つて行つた」主体が袁傪であるため，これを袁傪の行動の自らの報告に近いものとして受け止めると，「躍り出たのが見えた」というような形で文末を認識する可能性があるということであろう。しかし，前後の文には「袁傪は，しかし，供回りの多勢なのを恃み，駅吏の言葉を斥けて，出発した。」「虎は，あはや袁傪に躍りかかるかと見えたが……」とあって，袁傪は三人称化されている。この近傍の文の効果を考えれば，「通つて行つた」も，「果して」という表現も，むしろ語り手の介在を示すものであり，袁傪の直接の認知の提示とは受け止めがたい。この文を描出表現と見る場合があるとしても，優勢な判断とは言えない。

「虎は，あはや袁傪に躍りかかるかと……」の文では，「袁傪に」という呼称によって，語り手の介在が明確に示されており，「自分に」というようなダイクティックな表現をとっていないから，やはり描出表現と見ることは困難である。

三谷は，主格の不在が自由間接言説を可能にするというようなことを言っているが，それが作中人物の一人称の導入に直接つながるものではない。「山月記」ではしばしば情景描写が現れ，テクストの重要な位置をしめるが，それらは袁傪を介在させずに描かれている。三谷の言う主格の不在は描出表現を認定する指標としては十分ではない。

「叢の中から人間の声で……」の一文は，「聞えた」という感覚動詞・可能動詞があり，これは袁傪に，あるいは人々に聞こえたという語り手の報告ととれると同時に，この動詞を指標として袁傪の知覚が語られる描出表現と判断することは可能である。しかし，前後の近傍の文には，「袁傪は，しかし，供回りの多勢なのを恃み，駅吏の言葉を退けて，出発した。」「その声に袁傪は聞き憶えがあつた。」という形で主語「袁傪」が明示されている。この効果を認めると，通常の間接話法と見なすことができる。

「返事が無かつた。」という表現は，感覚動詞ではないので，描出表現の指標を見いだすことはできない。以下の文も同様である。

李徴の声の聞き手の主な人物として袁傪があり，語り手がそれに近い立場から報告している文を，感覚的に袁傪に同化したものと「解釈」し，そこから逆算的に描出表現を見いだすという手続きがとられているものと思われる。

「山月記」の語り手は，テクストを通じて，物語内容から超越した語り手であり，複数の人物の心の中を覗く語り手であると判断できる。ただ，袁傪の知覚と，語り手との距離感に関わって，判断が割れることは考えられる。テクスト後半においては，語り手の知覚はかなり袁傪に寄り添った位置を起点として提示されており，この視点の置き方の寄り添いの程度は読者の判断に委ねられる性質があるからだ。たとえば，次の部分を，語り手の知覚として感じるか，袁傪の知覚にごく近いものとして感じるかには読者による差があるものと考えられる。

漸く四辺(あたり)の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて，何処からか，暁角が哀しげに響き始めた。

「山月記」の語り手をめぐる近年の議論はむしろこの読者との関係の把握の相違をめぐるものであったと捉えることができる。

4．語り手と読者

三谷はまた，「その一人称/過去の李徴の事実譚的〈語り〉を聞くのが，聞き手としての袁傪で，自由間接言説を用いることで，あたかも読者が袁傪になったかのごとき錯覚を与えているのである。」[9]と述べ，読者が作中人物である袁傪に同化して，テクスト世界に参入するのだという見方を示している。

一方，田中は，「山月記」の語り手を「作中人物（主

人公）に同化される〈語り手〉」[10]であると把握した上で，「李徴という男には，美的な嘆きに留まることを許さない了解不能の《他者》の力が要請されていた。」[11]と述べる。すでに「李徴と袁傪の互いの他者性は弱い」（傍点田中）[12]と指摘した上でこの発言がなされれば，その「他者」とは，つまりは変化しない語り手，ないし読者のことに他ならない。

この三谷と田中の読者の役割に関する対立は，読者としての自らの解釈相互の対立に対応している。この対立は，前田角蔵の語りに関わる見解と田中の見解との対立に対して渥美が指摘したとおり，こうした指摘が「ともに成立し得るような言説の編成」[13]がなされているからであろう。渥美は，このことについて次のように述べている。

〈語り手〉は袁傪との出会い以降は，李徴の「最も親しい友」袁傪に身を沿わせ，李徴の声に耳をそばだてる聞き手の位置に身を置くことになる。それに伴って，李徴を敗残者と見なすかのような冷ややかな語り口は影を潜める。〈語り手〉は，一行が李徴の声に「息をのんで」聞き入り，李徴の即席の詩が披露されると「粛然として，この詩人の薄倖を嘆じた」（傍点引用者）と，李徴の言葉の感化力を保証する。その一方で，李徴の語りに全面的に取り込まれることのない袁傪の心内語を書き記し，これを相対化するのである[14]。

（注記　引用者＝渥美）

しかし，結論としては，渥美は，「『山月記』における〈語り手〉の変容とは，言わば李徴を「詩人」として認定していく仕掛けでもあったと言えよう。」[15]と述べており，田中の解釈には否定的である。

このような違いはなぜ生まれるのか。それは，「語り手」という概念が，テクストを読むという出来事に対応して語られるとき，実は「読み手（読者）」の鏡像として虚構されるものだからだ。田中の言うような語り手の変容とは，テクストを読みつつある読者の変容を反映したものに他ならない。だからこそ，最後にはテクスト全体を批判的に把握すべき第二の行為的な読者が要請されるのであり，実はそこにおいてはその把握を可能にする鏡像としての，全体を統括するもう一人の語り手が想定されているのである。一方，語り手の変容を認めず，テクスト後半を推進する語り手そのものを全体を統括する語り手として認めれば，それは李徴の悲劇に共感的な語り手・読者が想定されていることになる。生身の読者が基本的には語り手の語りに従うことになるというのは，想定される読み手が，想定される語り手と，鏡像をなすものとして設定されるからなのである。そしてこの設定は，読みを推進するために，どれほど自覚的であるかは別として，必ず要請されるものである。

5．文学教育とナラトロジー

丹藤博文は，「山月記」の教材研究に関わって次のようなことを述べている。

……教材研究とは，作品の行為性を明らかにすることだといってよい。ところが，「何を」に終始した場合，そこに〈意味〉はあっても〈行為〉はない。ある〈物語内容〉がいかに語られているか，語り（物語行為）はいかに物語をあらしめようとしているか，このことを問題としなければならない。とりわけ，『山月記』の場合，その語りの殆どが李徴のそれであるという特異な構造になっていることからも，語りという行為を問題としないわけにはいかない[16]。

ナラトロジーの観点から見れば，ナラトロジーは，読むという行為のうちに，テクストの特性と関わってどのような読みが可能性としてあり得るかをあらかじめ想定し，そのような相異なる読みが，どのようなテクスト分析によって相互に理解可能なものとなるかを検討するためのものである。その適用を図っても，テクストの特性の一面を取り上げ，一つの読み方を強制するようなことがあったとすれば，「何を」を問題とする教材研究・授業と何ら変わるところはない。

馬場重行は，「山月記」を素材とした拙論を対象として，批判的検討を展開した[17]。それに対する一種の反論は別の場所で行った[18]が，馬場の論にはたとえば次のよ

うな表現があらわれる。

……松本論における語り手は，〈読み〉のための概念装置としての機能が発揮されていないと思われる[19]。

……告白する自己が絡み取られている〈自閉〉の殻を破る力を持たず，真に必要としたはずの〈他者〉に出会えないまま，〈私のなかの他者〉のみに向き合い，悲嘆していくドラマであった。〈語り手のことば〉と〈李徴のことば〉という二つの〈ことば〉は，そうした〈自閉〉の強度を読者に示すために工夫された，独自の〈語り〉として機能していた[20]。

……「自己を貶めることに伴って生じるナルシスティックな陶酔感」といった問題は，「山月記」の現代における教材価値を検討する際，極めて有効な視座を提供するものと言ってよい。二種の文脈＝二つの〈ことば〉という〈語り〉の捉え方の有効性は，こうした実践の場において検討され，確実なものとされていく必要がある[21]。

ここには，ナラトロジーを特定の解釈の正当性を保証するための解釈装置としようとする動きが認められる。文学研究においては，新たな有力な解釈を提示することが目的化していることは理解できるが，第三の引用部分には，授業の現場における新たな権威の登場という感がぬぐえない。文学研究に見られる多様な解釈も，教室における多様な解釈も，その拠って来るところは様々であり，必ずしも交流可能な部分ばかりではない。たとえば，読者の個人的な体験を強く反映した解釈もあり得る。しかし，文脈co-textに関わる部分では，テクストとの関係性において，分析可能，説明可能な部分があり，その分析と説明のための道具としてナラトロジーがあるべきだと考える。従来の文学の教材研究へのナラトロジー適用にはすでに見たような適用における手続きの誤りの他に，基本的なナラトロジーの役割についての誤認がある。そしてこれらはいずれも，ナラトロジーを解釈装置としようとするところから生じている。

こうした誤りを克服しなければ，ナラトロジーは，解釈装置の一モードとして終わるか，個々の読みの実質とはかかわりない閉ざされた理論上の言葉として終わるか，いずれかであろう。現実の読みに即しながら，読みの多様性を多様なままに対立させつつ調停するための契機としてナラトロジーを活用していくべきである。

「山月記」における袁傪と語り手との関係に対する把握の相違も，個々の解釈をもたらす要因となっているのであれば，その相違の中身を検討することで，相異なる互いの読みを説明し理解していくためのなかだちとなるはずである。

注

(1) 松本修（1996a）（1996b）（1997a）（1997b）（1997c）（1998a）（1998-1999）（2000a）（2000b） 参照

(2) 松本修（1998a）

(3) 田中実（1996）p. 166

(4) 渥美孝子（1999）

(5) 田中実（1996）pp. 181-183.

(6) 以下，「山月記」本文の引用は，中島敦（1976）による。ただし，旧漢字は現在の字体に改めた。

(7) 三谷邦明（1997）pp. 68-69.

(8) 松本修（1998-1999）「話法と読者―「山月記」」『月刊国語教育』214 1999. 1. pp. 72-75.

(9) 三谷邦明（1997）p. 70.

(10) 田中実（1996）p. 183.

(11) 田中実（1996）p. 188.

(12) 田中実（1996）p. 180.

(13) 渥美孝子（1999）p. 134.

(14) 渥美孝子（1999）pp. 137-138.

(15) 渥美孝子（1999）p. 141.

(16) 丹藤博文（1999）p. 148.

(17) 馬場重行（1999）

(18) 松本修（2000a）

(19) 馬場重行（1999）p. 101

(20) 馬場重行（1999）p. 103

(21) 馬場重行（1999）p. 103

文　献

渥美孝子（1999）「中島敦「山月記」 外形と内心・語りの構図」 田中実・須貝千里編著『〈新しい作品論〉へ,〈新しい教材論へ〉 文学研究と国語教育研究の交差 3』 右文書院pp. 124-143.

田中実（1996）「〈自閉〉の咆哮――中島敦『山月記』」『小説の力　新しい作品論のために』大修館書店 pp.163-194.（初出『日本文学』1986. 5　日本文学協会）

丹藤博文 「『山月記』あるいは自己解体の行方」 田中実・須貝千里編著　前掲書　pp. 144-160.

中島敦（1976）『中島敦全集第一巻』 筑摩書房

馬場重行（1999）「〈語り〉の在り方をめぐって―中島敦「山月記」の場合―」『月刊国語教育』222　東京法令出版　1999. 8.

松本修（1996a）「「藪の中」における語りの外縁構造」『国語―教育と研究―』第35号　栃木県高等学校教育研究会国語部会　1996. 3. 15. pp. 15-20.

松本修（1996b）「「語りの構造」分析における〈時間〉概念に関する覚書き」『Groupe Bricolage紀要』No14 Groupe Bricolage 1996. 12. 25. pp. 2-7.

松本修（1997a）「国語科教材研究における「視点」概念の問題―「ごん狐」をめぐって」『国語科教育』第44集　全国大学国語教育学会　1997. 3. pp. 57-64.

松本修（1997b）「文学教材の〈語り〉の分析について」『上越教育大学研究紀要』第17巻第1号　1997. 9. pp. 147-158.

松本修（1997c）「「羅生門」の〈語り〉―教材研究におけるナラトロジー導入の可能性と問題点―」『日本近代文学』第57集　日本近代文学会　1997. 10. pp. 160-166.

松本修（1998a）「「ごんぎつね」における自由間接話法」『読書科学』164　日本読書学会1998. 7. pp. 41-46.

松本修（1998-1999）連載「文学教材とナラトロジー」『月刊国語教育』211-216　東京法令出版

・「批評の現在とナラトロジー―「羅生門」」211 1998. 10. pp. 68-71. ・「作者と語り手―「舞姫」」212 1998. 11. pp. 72-75. ・「語り手と人物―「城の崎にて」」213 1998. 12. pp. 68-71. ・「話法と読者―「山月記」」214 1999. 1. pp. 72-75. ・「語りの消滅―「蠅」」215 1999. 2. pp. 68-71. ・「ナラトロジーを超えて？―「こころ」」216 1999. 3. pp. 68-71.

松本修（2000a）「文学教育のナラトロジー」『月刊国語教育』227　東京法令出版　2000. 1　pp. 92-95.

松本修（2000b）「「ごんぎつね」の最終場面における読みの多様性」『月刊国語教育研究』336　日本国語教育学会　2000. 4　掲載予定

三谷邦明（1996）「中島敦『山月記』の虚構構造――言説分析の視点から――」『日本文学』第45巻第7号　日本文学協会　pp. 68-70.

SUMMARY

In recent years, various studies with a reference to the narration in the short story "Sangetsuki" by Nakajima Atsushi have been published. There are several arbitrary interpretations regarding the "narrator" in these studies.

In this paper, several studies that contain a reference to the narration in "Sangetsuki" were analyzed. It was argued that previous studies contain some errors in the way interpretations of the category "narrator" were given and there is a misunderstanding of the significance of applying categories of narratology in this connection. The categories of narratology may be applied as the basis for interpretations when exchanging them but not as grounds for justifying a certain interpretation.

The Science of Reading, Vol. 44, No. 2 (2000)

能動的触察条件における点字の読み易さの検討
——2綴り文字の認知時間について——*

筑波大学　佐　藤　将　朗**

I．はじめに

点字触読に関する研究は，古くから多くの研究者達によって行われている（Foulke，1991；佐藤，1988など）。これらによると点字触読は普通文字の読書に比べ3倍から4倍の読時間がかかり，習得するには専門的訓練を継続的に受ける必要があるとされている。しかしこれは読み手の能力の側面のみ検討してきた結果である。読材料の側面について焦点をあてて検討しているものはいくつか見られる程度であり，これらが教育やリハビリテーションの基礎的知見として生産的に用いられているとはいえない。また先行研究においても方法論上の問題として通常の触読状態とは言い難い実験条件が設定されていることが多いため，被験者にとって効果的な触読は行われにくかった。

この点を解決するために筆者はこれまでに能動的触察条件における点字1文字ごとの認知時間を実験的に測定し，点字のレジビリティーに関する検討を行っている（佐藤，1998）。それによると点字の認知時間は文字を構成する点の数が増えるにつれて明らかに増加していた。

点字のレジビリティーに関するこの知見は一つの疑問を生じさせる。すなわち点字1字の情報量の多少が，そのまま通常の触読場面でも点字の読み易さに強い影響を与えているのかということである。レジビリティーは読み易さの最も基礎であるが，読書の目標とは書かれている情報を理解することである。

Nolan and Kederis（1969）は点字のレジビリティーと点字単語の認知時間の関係について明らかにしている。これによると点字単語の認知時間はそれを構成する点字の認知時間の合計を超えることを示した。また単語を構成する点の数が増えるにつれて認知時間も長くなることも示している。しかし先に述べたようにこれは通常の触読状態が反映されているわけではないため，より自然な触読条件の下でさらなる読材料の吟味が必要である。

ところで現在使用されている英語点字では，使用頻度の高い文字，単語，語句については，省略型が用いられている。もともと省略型が実用化されたのは，これを用いることで触読速度を高めようという理由からである（Harleyら，1997）。実際，省略型を用いた触読材料を用いることで触読速度は高まるわけであり，このことから読速度に影響を与えている読材料の属性について分析するために，触読者における認知的側面が考慮されよう。

使用頻度の高い読材料が読時間を短くするということから，我国の日本点字においても触読者の語連想が読速度に影響を与えている可能性が考えられる。語連想は記憶実験で用いられる方法であるが，我国では幸いなことに梅本（1955）による2綴り文字の連想価に関するデータが存在する。点字の読材料を細分化して検討するということでは，2綴り文字は読材料として適しているといえよう。

これまで普通文字の読書においても語連想と読速度の

---

* A study on the readability of braille in active exploration: The recognition time for two-character combination

**SATO, Masaaki（University of Tsukuba）

関連性について検討しているものはないが，点字触読においてこれを検討することにより，点字の読材料の属性について有益な基礎的知見が得られるであろう。

本研究では，能動的触察条件における点字の読み易さをさらに検討するために，点字２綴り文字の認知時間を実験的に測定する。さらに２綴り文字の認知時間を規定する要因として，認知的側面の中でも連想価（association value）に焦点をあてて分析をする。

Ⅱ．方　法

１．被験者

点字触読の熟達者で，現在もなお点字を使用している15歳以上の盲人７名（大学生）。

２．手続き

① 実験システム

触読時の触知時間と読指運動を，計算機システムTIP-DAS（Tactual Information Data Acquisition System）により測定する。本システムは普通文字の読書研究で用いられる眼球運動測定法を，触読に適用するために制作されたものであり，触読時の指の軌跡，指の停留時間，行間運動の時間が，１/100秒単位で正確に測定できる。

② 読材料

梅本の無連想価分類表から，無作為に抽出した２綴り文字30文字を，連想価の高いものから３段階に分類した。これを２マスずつ空け配置した。なお，予備調査により本実験で用いた読材料の連想価について大学生30名と視覚障害者５名に対し，２綴り文字30字それぞれの連想の量を基に順位を決定し，梅本の連想価とのSpearmanの順位相関を求めたところ，大学生（r_s=0.83，n＝30，p＜.05），視覚障害者（r_s=0.71，n＝5，p＜.05）共に有意な相関が得られたので，梅本の連想価を分析に使用できると判断した。

③ 実験方法

被験者は最初に指サックをはめた状態で練習を数回行い，指サックに慣れた後「できるだけ速く音読するように」という教示を与えた。誤読については実験者が音読と読材料を比較し，チェックした。

Ⅲ．結　果

１．連想価別２綴り文字の認知時間について

Table １には２綴り文字の認知時間の平均値と標準偏差を連想価別に示した。この結果に基づき，各２綴り文字の連想価と認知時間の関連性について相関係数を求めたところ，有意な相関が得られた（r＝−0.85，n＝7，p＜.05）。これにより点字の熟達者においては連想価の高い２綴り文字ほど認知時間が短くなり，連想価の低い文字ほど認知時間が長くなることが明らかとなった。

次に連想価別の認知時間の差異について検討する。Table １の結果に基づき分散分析を行ったところ，３

Table １　連想価別の２綴り文字の認知時間の平均値とSD

Association value								
High			Middle			Low		
Char.	Mean(sec)	SD	Char.	Mean(sec)	SD	Char.	Mean(sec)	SD
⠕⠊	0.175	0.016	⠞⠑	0.192	0.023	⠛⠁	0.213	0.021
⠞⠊	0.176	0.026	⠞⠕	0.182	0.022	⠕⠁	0.216	0.021
⠑⠊	0.182	0.022	⠑⠁	0.184	0.023	⠞⠕	0.262	0.023
⠁⠑	0.146	0.023	⠊⠊	0.195	0.034	⠞⠁	0.231	0.019
⠊⠑	0.165	0.021	⠊⠞	0.211	0.031	⠊⠊	0.233	0.022
⠊⠊	0.174	0.031	⠊⠁	0.195	0.026	⠊⠁	0.211	0.021
⠊⠊	0.161	0.024	⠊⠊	0.184	0.031	⠊⠊	0.231	0.032
⠁⠊	0.154	0.014	⠊⠞	0.181	0.021	⠑⠞	0.192	0.024
⠁⠑	0.163	0.024	⠊⠑	0.213	0.024	⠑⠊	0.244	0.022
⠊⠊	0.171	0.026	⠑⠁	0.214	0.022	⠞⠊	0.221	0.022

群間に有意な主効果が得られた（F(2，27)＝36.31，p＜.05)。どこで有意な差が生じたのかFisherのPLSDを用いて多重比較をした結果，全ての群間で有意差が見られた（Mse＝4.471E−4，p＜.05)。これにより点字の熟達者において，2綴り文字の認知時間は連想価別に差が生じることが明らかとなった。

2．2綴り文字の点の数が認知時間に与える影響について

1字綴りの点字のレジビリティーにおいては文字を構成する点の数が認知時間に強い影響を与えることが示されている。そこでここでは2綴り文字の場合に，点の数が認知時間にどのような影響を与えているかを検討する。Table 1の結果に基づき，2綴り文字を構成する点の数と認知時間の関連性について相関係数を求めたところ，有意な相関は得られなかった（r＝0.19，n＝7，p＜.05)。これにより，2綴り文字の認知時間では点の数による影響はあまり受けないということが示唆される。

次に2綴り文字を構成する点の数別の認知時間の差異を検討するために，分散分析を行ったところ有意な相関は得られなかった（F(7.22)＝0.59，p＞.05)。これにより点字の熟達者においては，2綴り文字の点の数は全体的には認知時間に影響を与えないということが明らかとなった。

3．2綴り文字の認知時間とそれを構成する文字の総合認知時間の関係について

Table 2には分析対象となった2綴り文字を構成する各文字について，被験者によって得られた1文字ずつの認知時間の平均値と標準偏差を示す。これを基に，2綴り文字を構成する各文字の認知時間の合計を予想された総合認知時間（synthetic time）とし，実際に得られた認知時間と比較した。2綴り文字の予想された総合認知時間に対し，実際の認知時間がどれだけ短縮されているかを表すために，以下の式を用いて認知時間の短縮率を求めた。

（予想された総合認知時間－実際の認知時間）÷予想された総合認知時間×100（%）

Table 3には2綴り文字を認知時間の短縮率別に示した。これによると短縮率が40%以上の2綴り文字はハラの一個，30%以上40%未満のものはカオ，セミ，メモ，ロルの四個，20%以上30%未満のものはウミ，オリ，シオ，シロ，ハイ，ミサ，メセ，メツの八個，10%以上20%未満のものはイシ，エネ，オハ，セソ，チフ，テヨ，メミの七個，1%以上10%未満のものはウオ，モオ，ナヨ，ミモ，メハ，ラウ，ルムの七個であり，ヌネ，ヌヨ，リニの三個は予想された総合認知時間よりも増加してい

Table 2　2綴り文字を構成する文字のレジビリティー

Char.	Mean(sec)	SD	Char.	Mean(sec)	SD
⠁	0.098	0.013	⠊	0.112	0.02
⠂	0.1	0.024	⠑	0.126	0.026
⠄	0.103	0.019	⠉	0.108	0.014
⠈	0.109	0.024	⠒	0.123	0.031
⠐	0.107	0.023	⠓	0.134	0.027
⠠	0.12	0.026	⠔	0.122	0.024
⠡	0.113	0.019	⠕	0.125	0.025
⠢	0.125	0.027	⠖	0.123	0.025
⠤	0.128	0.033	⠗	0.111	0.021
⠨	0.123	0.02	⠘	0.108	0.018
⠰	0.115	0.015	⠙	0.120	0.020
⠱	0.132	0.018	⠚	0.118	0.014
⠲	0.118	0.027	⠛	0.119	0.024
⠴	0.108	0.017			

Table 3　2綴り文字における認知時間の短縮率

40% or more	⠣⠜
30% or more	⠜⠣ ⠶⠶ ⠶⠶ ⠣⠜
20% or more	⠛⠶ ⠣⠜ ⠜⠣ ⠜⠣ ⠣⠜ ⠶⠜ ⠶⠶ ⠶⠣
10% or more	⠠⠶ ⠛⠠ ⠣⠜ ⠜⠣ ⠜⠣ ⠶⠣ ⠶⠶
1% or more	⠛⠜ ⠶⠜ ⠣⠜ ⠶⠶ ⠶⠜ ⠜⠛ ⠛⠶
increase	⠛⠛ ⠛⠣ ⠛⠜

た。

またTable 1の結果から，連想価の高い2綴り文字は短縮率が高い群にほぼおさまり，連想価の低い2綴り文字ほど短縮率の低い群に存在する傾向があるといえる。また予想された総合認知時間よりも増加した三個の2綴り文字は，いずれも最も低い連想価のものであった。

Ⅳ. 考　察

本研究では能動的触察条件における点字の読み易さを検討するために，点字の熟達者を被験者とし，より自然な触読条件を反映した実験システムにより，2綴り文字の認知時間を測定した。その結果，連想価の高い2綴り文字ほど認知時間が短くなり，連想価の低い2綴り文字ほど認知時間が長くなることが明かとなった。

ところで先行研究では，点字のレジビリティーと文字数が増えた場合の認知時間が共に検討されているが，いずれの場合も文字を構成する点の数が多くなるにつれて，認知時間も長くなることを報告している（Nolan and Kederis, 1969)。しかし2綴り文字の認知時間を検討した本研究では，レジビリティーにおいて見られた文字を構成する点の数の影響は見い出されなかった。これは実験条件の違いによるものであろう。すなわち比較的受動的な触読条件を用いた先行研究の被験者に比べて，能動的触察条件を用いた本研究の被験者ほうが，文字を構成する点の数という情報量を認知するだけでなく，点字表記からなるマスの統合部分（integral parts）の読指時間も減少させる傾向があったといえる。実際，連想価が高い2綴り文字ほど認知時間が短くなり，さらにレジビリティーを基にした文字全体の予想された総合認知時間を越えることはなかった。しかし連想価の低い2綴り文字では予想された総合認知時間を越える文字も見られ，連想価の高い文字に比べれば，読指時間を減少させる傾向は弱かった。

今後の課題として読材料のレベルをさらに拡大した場合の点字の読み易さの検討を行なうことが必要と考える。本研究で得られた知見が，単語レベルまたは単文や文章レベルの触読に，有意味やファミリアリティーがどのような影響を与え，これがどのように変化していくかについて検討することで，点字触読に関するさらなる知見を得ることができる。

本研究の結果は無意味綴り文字を実験材料として用いた場合に，連想価を考慮した実験材料作成の必要性を示すものであった。従来連想価を参考にした無意味綴り文字は記憶実験の材料として重視されていたが，読みの研究においても無意味綴り文字を実験材料として用いることを考慮すべきということを示唆している。これは点字触読はもちろんのこと普通文字の読みについても同様に考えてよいであろう。

文　献

FOULKE, E. (1991) Braille. In M.A. Heller, & W. Schiff (Eds.), *The psychology of touch*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers, Hillsdale, New Jersey, 219–233.

HARLEY, R.K., TRUAN, M.B. and SANFORD, L.D. (1997) *Communication skills for visually impaired learners.* Charles C Thomas, Publishers, Ltd.

MILLAR, S. (1988) Aspects of shape and texture in touch: Redundancy and interference in children's discrimination of raised dot patterns. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 27, 367–381.

NOLAN, C.Y., & KEDERIS, C.J. (1969) *Perceptual factors in braille word recognition*. American Foundation for the Blind, New York.

佐藤将朗（1998）点字のレジビリティーに関する研究. 日本読書学会第42回研究大会発表資料集，12–17.

佐藤泰正（1988）視覚障害心理学．学芸図書.

徳田克己・佐藤泰正（1987）盲人の点字触読速度に関する研究(2)—速度に影響を与える要因の検討—．読書科学，31，66–71.

梅本堯夫(1955)清音2字音節の無連想価及び有意味度. 心理学研究，26巻，8–15.

SUMMARY

This study examined the readability of braille in active exploration. Seven experienced braille readers read 30 two-character combinations that were randomly made up. The recognition times of these were analyzed according to the association value of each two-character combinations.

The results showed that two-character combinations with a high-association value were read faster than low-association value combinations by good braille readers. There was a tendency for actual recognition times to be less than the anticipated synthetic recognition times, which were derived from legibility. The effect of the number of dots, which was the main characteristic of legibility, was not reflected in the recognition times of two-character combinations of braille.

The Science of Reading, Vol. 44, No. 2 (2000)

待遇表現の適切性判断における地域差，世代差および男女差の影響*

広島大学　宮　岡　弥　生
広島大学　玉　岡　賀津雄**

はじめに

「どちらへいらっしゃるんですか。」と「どこへ行くの。」の2つの表現は，相手にどこへ行くのかを尋ねるという共通の表現意図をもっている。しかし，これらを用いる相手や用いられる場面は，たいていの場合異なっている。敬語を含む前者の表現は通常，少し改まった場面であまり親しくない人に対して使われる。それに対して敬語を含まない後者の表現は，くだけた場面で同年配か年下の親しい友人に対して用いられることが多いであろう。このように，敬語の有無にかかわらず，話し手がその場の人間関係や場所柄・状況などについての気配りを土台にして選ぶいろいろな表現のことを待遇表現と呼ぶ（文化庁，1996；菊地，1997）。

待遇表現の使い分けに関する従来の研究は，発話場面に居合わせる人物を話し手と聞き手とに分けた場合、概ね話し手の立場から待遇表現を捉えたものであり、聞き手の側からの議論はあまりなされていない。しかし，待遇表現は基本的に話し手と聞き手の双方が存在して初めて成立するものである。仮に，話し手が置かれた状況において適切であると考えて用いたとしても，聞き手の側から判断すると違和感がある場合もあると考えられる。円滑なコミュニケーションを図る上で待遇表現が重要な役割を果たすという事実を考慮に入れると，聞き手の側の感じ方も無視できない。むしろ，待遇表現の発話場面において，その使い方が適切であるかどうかの判断は，話し手ではなく聞き手の側に委ねられていると言っても過言ではないであろう。そこで本研究では，待遇表現の使い分けを，従来のような話し手の側ではなく，聞き手の側から捉え，それを適切さという観点から質問紙を用いて数量的に測定した。そして，その適切さに対して，地域差，世代差，男女差があるのかどうかについて検討した。

具体的な予測としては，先行研究から以下のことが考えられる。まず、地域差について井上（1988）は、日本全国の各地域に，共通語の敬語と平行する形で方言の敬語が存在しているため日本語の敬語にはかなり著しい地域差があり，現代共通語の敬語体系ですべてを説明することはできないと述べている。方言の敬語について言えば，例えば，九州方言，西部方言，東部方言の順に，西の方ほど敬語の使い分けが多いことが報告されている（国立国語研究所，1957）。また，一見，全国一律であるかのように思われる共通語の待遇表現の丁寧さも，地域によって異なっている（文化庁，1999）。この理由として，方言の話されている地域では共通語で話すこと自体丁寧であると考えられている（加藤，1973）ことが挙げられるであろう。実際，目上の聞き手の行為を面と向かって言う場面で使われる形式は，熊本，大阪，東京，山形のうち，大阪で方言形と共通語形がほぼ半々である以外は，共通語形が圧倒的に多い（吉岡，1997）。以上

* The effects of differences in regional area, generation and gender on the appropriateness of polite expressions in Japanese.
**MIYAOKA, Yayoi (Hiroshima University) and TAMAOKA, Katsuo (Hiroshima University)

のことから，中国地方と関東地方を比べた場合，共通語の待遇表現を丁寧だと感じる度合いについては，中国地方の方が高いと思われる。しかし，本研究で明らかにしようとしている聞き手の捉えた適切さは，これと同じであるとは限らない。また，今回調査を行った中国地方と関東地方のもう一つの大きな違いは，中国地方において尊敬語の「れる・られる」が比較的高い待遇価値を持つものとして広く使われているということである。この方言の影響が本調査の結果にどのように現れるか興味深い。

次に，世代差に関しては，一般的に，若い世代の敬語の乱れが指摘されることが多い。敬語意識に関する調査でも，敬語を「適切に使っていると思う。」と答えた人の割合は，年代が下がるにつれて減っている（文化庁，1995)。しかし，その一方で，敬語を「相手や場面によって使い分ける方がよいと思う」人が，20代の男性では82.2%，女性では88.5%であるのに対して，50代の男性では67.7%，女性では81.4%であった（文化庁，1995)。この現象について北原（1995）は，若年層の人達には，敬語にはさまざまな表現があり，それを使い分ける方がよいが，敬語の使用が未熟であると思っている人が多いのだと指摘している。

このように，敬語に対する意識や実際の運用能力には世代差がある。従って，聞き手が捉えた待遇表現の適切さについても，同様に世代差があると考えられる。具体的には，世代が上になるほど丁寧な表現を好ましく思うという結果が得られると予想される。

また，待遇表現において男性と女性とで違いがあることは，これまでもよく指摘されてきた。例えば，女性は丁寧度の低い表現を男性に比べてより低くランクづけしており（井出・荻野・川崎・生田，1986)，男性より丁寧な話し方をする（文化庁，1997)。逆に，男性は女性より乱暴な表現のレパートリーが多い（文化庁，1996)。また，同じ場面で同じ依頼をするのにも，「～して」「～してよ」などの押しつけの強い依頼文は男性に多く，「～していただけない」のようなあまり押しつけがましくない表現や，はっきり依頼せず，やってほしいことをほのめかすような言い方は女性に多い（文化庁，1995)。さらに，同様の傾向は，言語習得の途上にある中高生にも見られる。国立国語研究所が1989年から1992年にかけて東京都，大阪府，山形県の中学校・高等学校の生徒を対象として行った調査（杉戸，1996）によると，先生・上級生との人間関係の中での言葉の使い分けには，男子よりも女子の方が留意しているという結果であった（尾崎，1997)。以上のように，話し手側から見た待遇表現の使い分けに男女差が見られることから，聞き手が捉えた待遇表現の適切さにも，男女差があると考えられる。具体的には，女性の方が男性よりも丁寧な表現を好ましく思うと予測される。

調　査

被験者　質問紙の回答者としての被験者は，以下の通りである。中国地方（広島，岡山の２県）在住の男性145名，女性187名の合計332名，および関東地方（東京，千葉，埼玉，神奈川の４県）在住の男性62名，女性154名の合計216名である。総計は548名となった。なお，今回，被験者の居住地を中国地方と関東地方の２地域としたのは，方言が話されている地域と共通語が話されている地域とで，共通語の待遇表現の適切性の判断に違いがあるかどうかを明らかにするためである。

質問紙　本調査では，２つの場面を想定して質問紙を作成した。場面１は，「あなたが道を歩いていると，見知らぬ女性が近づいてきて，あなたが駅の方へ行くのかどうかを尋ねました。」（以下，「初対面」と表記する。）である。場面２は，「あなたは，あなたの家で，家族ぐるみのつき合いをしている女性と２人で雑談をしています。その時その女性が，次の日に開かれるコンサートにあなたが行くのかどうかを，あなたに尋ねました。」（以下，「親しい間柄」と表記する。）である。これら２つのそれぞれの場面について，待遇価値の異なる「行くの」・「行くんですか」・「行かれるんですか」・「いらっしゃるんですか」の各表現を発話者の日本人女性が用いたとき，どのように感じるかを被験者に尋ねた。待遇表現に対す

る被験者の感じ方は，‘とても気になる’を1点，‘少し気になる’を2点，‘どちらとも言えない’を3点，‘あまり気にならない’を4点，‘全然気にならない’を5点とする5段階尺度で測定した。これを，待遇表現の「適切度」と呼ぶ。つまり，「適切度」とは，待遇表現を聞き手の側からみた場合に，適切だと感じられる度合いである。

なお，本調査においては，待遇表現に対する被験者の感覚を刺激するために，発話者を女性に限定した。これは，女性の方が男性よりも丁寧な言葉づかいをするというのが一般的な認識であるため，発話者が女性である方が，聞き手が発話者に敬語を要求する度合いが高いと思われるからである。場面条件としての女性発話者については，上記の「初対面」と「親しい間柄」の2つを，さらに年齢で「年下」と「年上」の2種類に分けた。従って，質問の条件として設定した女性発話者は，合計4種類となる。

分析と結果

本研究は，被験者内の変数として，「行くの」，「行くんですか」，「行かれるんですか」，「いらっしゃるんですか」の4つの待遇表現を，また被験者間の変数として中国地方と関東地方の2地域，20代，30代，40代，50代の4世代，および男性と女性の2種類で，合計3種類の変数を設定した。以下，地域差，世代差および男女差の3つの観点から分析の結果を報告する。

1．地域による適切性判断の違い

1-1．発話者の女性が初対面の年下である場合

各待遇表現の地域別適切度の平均値は，Fig. 1およびFig. 2に示した通りである。被験者内変数を待遇表現，被験者間変数を地域として，4×2の分散分析を行った。その結果，地域［$F(1,546)=6.83$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=550.42$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，地域と待遇表現の交互作用［$F(3,1638)=9.35$，$p<.01$］も有意であった。さらに，4つの待遇表現の適切度をスチューデント・ニューマン・

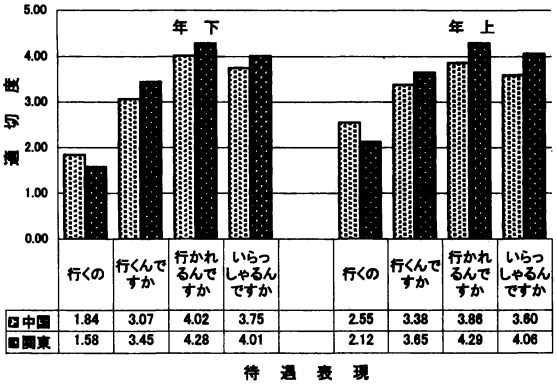


Fig. 1　初対面の女性発話者が用いた待遇表現に対する地域別適切度

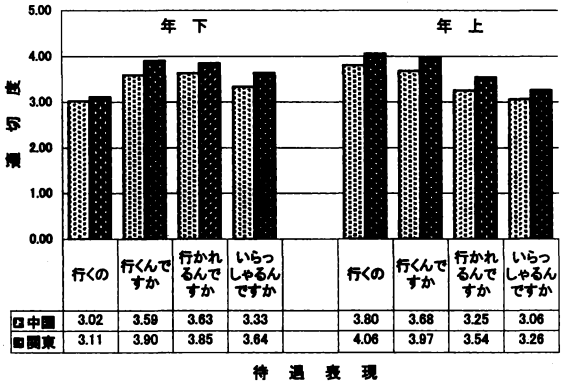


Fig. 2　親しい女性発話者が用いた待遇表現に対する地域別適切度

クールズ検定（Student–Newman–Keuls Test；SNK検定）による多重比較で分析した。その結果，4つの待遇表現のすべてについて有意な地域差があった。具体的には，「行くの」を除いては，すべて中国地方よりも関東地方の方が適切度が高かった。

1-2．発話者の女性が初対面の年上である場合

待遇表現と地域の4×2の分散分析を行った。その結果，地域［$F(1,546)=7.28$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=260.76$，$p<.01$］の主効果が有意であった。また，地域と待遇表現の交互作用［$F(3,1638)=19.01$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した結果，4つの

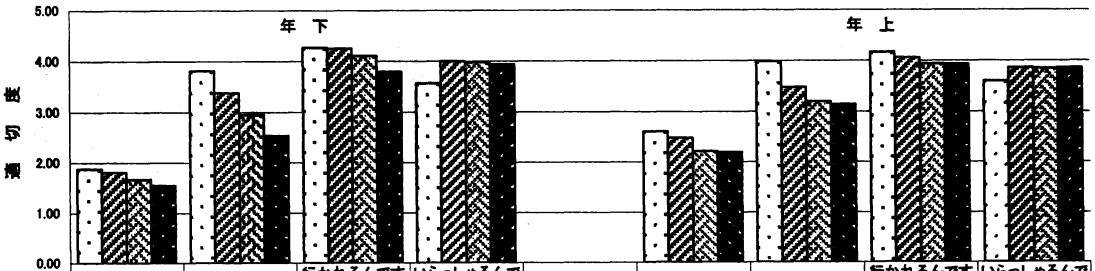
待遇表現のすべてについて有意な地域差があった。「初対面の年下」の場合と同様に，「行くの」は関東地方よりも中国地方の方が適切度が高かったが，その他の表現はすべて中国地方よりも関東地方の方が高かった。

1－3．発話者の女性が親しい年下である場合

同様の分散分析の結果、地域［$F(1,546)=11.68$, $p<.01$］および待遇表現［$F(3,1638)=35.37$, $p<.01$］の主効果が有意であった。地域と待遇表現の交互作用は有意ではなかった。待遇表現ごとに、適切度をSNK検定による多重比較で分析し，待遇表現別の地域差の有無について検討した。その結果，「行くの」については有意な地域差がなかった。その他の表現については地域差が見られ，中国地方よりも関東地方の方が適切度が高かった。

1－4．発話者の女性が親しい年上である場合

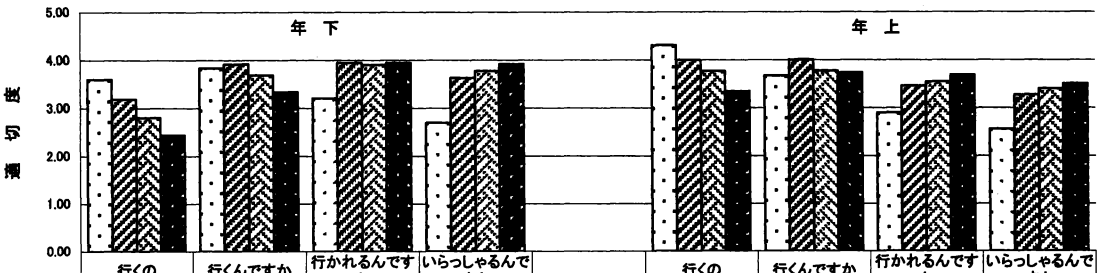
同様の分析の結果，地域［$F(1,546)=11.19$, $p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=51.07$, $p<.05$］の主効果が有意であった。しかし，地域と待遇表現の交互作用は有意ではなかった。待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した結果，「いらっしゃるんですか」には有意な地域差がなかった。その他の表現には有意な地域差があり，すべて中国地方よりも関東地方の方が適切度が高かった。これは，「親しい年下」の場合とは，逆の現象である。



	行くの	行くんですか	行かれるんですか	いらっしゃるんですか	行くの	行くんですか	行かれるんですか	いらっしゃるんですか
□20代	1.88	3.82	4.27	3.57	2.61	3.99	4.17	3.60
▨30代	1.81	3.38	4.25	4.00	2.48	3.48	4.06	3.86
▨40代	1.67	2.95	4.11	3.98	2.21	3.20	3.94	3.85
■50代	1.55	2.54	3.80	3.94	2.19	3.14	3.93	3.86

待 遇 表 現

Fig. 3　初対面の女性発話者が用いた待遇表現に対する世代別適切度



	行くの	行くんですか	行かれるんですか	いらっしゃるんですか	行くの	行くんですか	行かれるんですか	いらっしゃるんですか
□20代	3.60	3.84	3.21	2.70	4.31	3.68	2.90	2.56
▨30代	3.19	3.92	3.95	3.64	4.00	4.01	3.46	3.27
▨40代	2.81	3.69	3.91	3.78	3.77	3.78	3.55	3.40
■50代	2.44	3.34	3.95	3.92	3.35	3.74	3.69	3.51

待 遇 表 現

Fig. 4　親しい女性発話者が用いた待遇表現に対する世代別適切度

2．世代による適切性判断の違い

2－1．発話者の女性が初対面の年下である場合

各待遇表現の世代別適切度の平均値は，Fig. 3およびFig. 4に示した通りである。被験者内変数を待遇表現，被験者間変数を世代として，4×4の分散分析を行った。その結果，世代［$F(3,544)=10.48$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1632)=559.16$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，世代と待遇表現の交互作用［$F(9,1632)=11.26$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」については20代が最も適切度が高く，次が両者に有意差のなかった30代と40代，最も適切度が低かったのは50代であった。「行くんですか」は，すべての世代の適切度が互いに有意に異なっており，世代が上がるほど適切度が低くなっていった。「行かれるんですか」は50代が他の世代に比べて有意に低かった。「いらっしゃるんですか」は，20代が他の世代に比べて有意に低かった。つまり，20代から50代までのすべての世代で適切度が有意に異なっていたのは，「行くんですか」のみであった。

2－2．発話者の女性が初対面の年上である場合

同様の分散分析を行った。その結果，世代［$F(3,544)=5.61$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1632)=237.45$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，世代と待遇表現の交互作用［$F(9,1632)=5.68$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」については20代が最も適切度が高く，次が30代で，最も適切度が低かったのは両者に有意差のない40代と50代であった。「行くんですか」は，20代の適切度が他の世代に比べて有意に高かった。「行かれるんですか」および「いらっしゃるんですか」は、ともにすべての世代間に有意差はなかった。

2－3．発話者の女性が親しい年下である場合

同様の分散分析を行った。その結果，世代［$F(3,544)=5.08$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1632)=45.70$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，世代と待遇表現の交互作用［$F(9,1632)=23.85$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」についてはすべての世代間に有意差が見られ，世代が上がるほど有意差が低くなっていった。「行くんですか」は，50代が他の世代に比べて有意に適切度が低かった。「行かれるんですか」は20代が他の世代とは有意に低かった。「いらっしゃるんですか」も，20代が他の世代とは有意に低かった。つまり，適切度について，すべての世代間に有意差があったのは，「行くの」のみであった。

2－4．発話者の女性が親しい年上である場合

同様の分散分析を行った。その結果，世代［$F(3,544)=3.74$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1632)=45.38$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，世代と待遇表現の交互作用［$F(9,1632)=15.57$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」については最も適切度が高かったのは20代で，次が両者に有意差のなかった30代と40代，最も適切度が低かったのは，50代であった。「行くんですか」は，世代間に有意差はなかった。「行かれるんですか」および「いらっしゃるんですか」は，20代が他の世代とは有意に低かった。つまり，「行くんですか」のみ，すべての世代間に有意な適切度の差があった。

3．性別による適切性判断の違い

3－1．発話者の女性が初対面の年下である場合

各待遇表現の男女別適切度の平均値は，Fig. 5およびFig. 6に示した通りである。被験者内変数を待遇表現，被験者間変数を男女として，4×2の分散分析を行った。その結果，男女［$F(1,546)=12.06$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=490.51$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，男女と待遇表現の交互作用［$F(3,1638)=4.43$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」と「行くんですか」は男女間に有

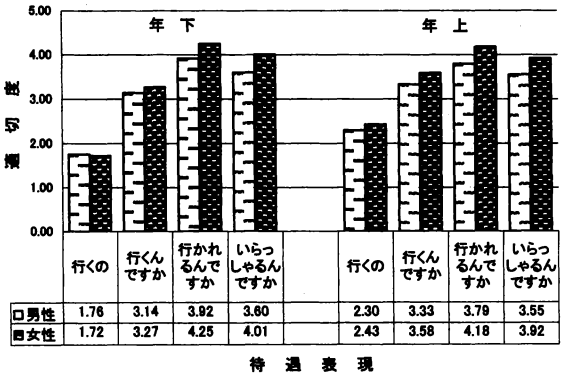


Fig. 5 初対面の女性発話者が用いた待遇表現に対する男女別適切度

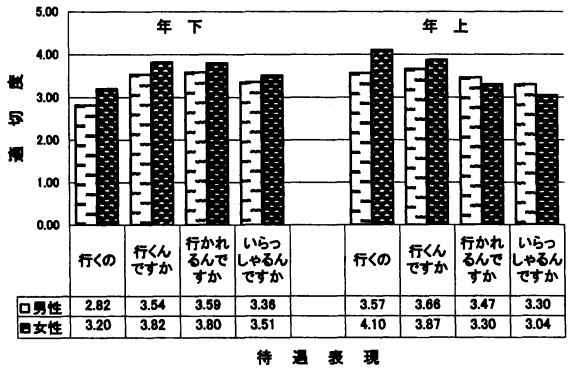


Fig. 6 親しい女性発話者が用いた待遇表現に対する男女別適切度

意差がなく，「行かれるんですか」と「いらっしゃるんですか」については女性の方が男性よりも適切度が高かった。つまり，性別の影響が見られたのは，待遇価値の比較的高い表現であった。

3－2．発話者の女性が初対面の年上である場合

待遇表現と男女の4×2の分散分析を行った。その結果，男女［$F(1,546)=18.45$, $p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=213.38$, $p<.01$］の主効果が有意であった。しかし，男女と待遇表現の交互作用は有意ではなかった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した結果，「行くの」は男女間に有意差がなかったが，その他の表現はすべて女性の方が男性よりも適切度が高かった。つまり，待遇価値の低い表現については，性別の影響は見られなかった。

3－3．発話者の女性が親しい年下である場合

同様の分散分析の結果，男女［$F(1,546)=13.80$, $p<.01$］および待遇表現［$F(3,1638)=34.88$, $p<.01$］の主効果が有意であった。男女と待遇表現の交互作用は有意ではなかった。待遇表現ごとに、適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」と「行くんですか」には有意差があり，ともに女性の方が適切度が高かった。一方，「行かれるんですか」と「いらっしゃるんですか」には有意差がなかった。つまり，待遇価値が比較的高い表現について，性別の影響があった。これは，「初対面の年下」の場合とは逆の現象である。

3－4．発話者の女性が親しい年上である場合

同様の分析の結果、男女の主効果に有意差はなかった。しかし，待遇表現［$F(3,1638)=39.39$, $p<.05$］，および男女と待遇表現の交互作用［$F(3,1638)=13.25$, $p<.05$］は有意であった。待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した結果，「行くの」と「行くんですか」は女性の方が男性よりも有意に適切度が高かった。しかし，「行かれるんですか」と「いらっしゃるんですか」には男女差がなかった。つまり，「親しい年下」の場合と同様に，待遇価値の比較的低い表現について，性別の影響があった。

総合考察

本研究では，適切度を判断する聞き手の側の属性である地域，世代，男女の3つの要因が，待遇表現の適切度に与える影響を測定した。以下，それぞれの要因について考察する。

1．地域差の影響

方言が話されている中国地方と共通語が話されている関東地方とで，共通語の待遇表現の適切さの判断に違いが見られた。初対面の場合は，発話者が年下であるか年上であるかに関係なく，「行くの」という丁寧とは言えない表現を用いることに対して，中国地方の人達の方が

関東地方の人達よりも寛容であった。この理由として，地域による待遇表現体系の違いが考えられる。つまり，既述のように，方言が広く使われている地方では，方言で話していたものを共通語に言いかえること自体，すでに丁寧な言い方をしていることになるのである（加藤，1973)。従って，「行くの」という丁寧でない表現も，中国地方においては共通語であるという点で方言の「行くん」よりも丁寧であると感じられるのである。「行くの」の適切度が中国地方の方が高かったのは，このためであると考えられる。

日本語では方言と共通語の混在によって地域ごとに待遇表現体系が異なっており，語形が同じ共通語の待遇表現であっても，待遇価値が地域によって異なっている（文化庁，1999)。そのため，本研究で明らかになったように，聞き手による待遇表現の適切性の判断も，中国地方と関東地方とで異なっていたのであろう。

また，全体的な傾向として，関東地方の方が中国地方よりも適切度が高かった。具体的には，同じ初対面の場面において，「行くの」よりも待遇価値の高い「行くんですか」，「行かれるんですか」，「いらっしゃるんですか」については，関東地方の人達の方が中国地方の人達よりも，より適切であると受け取っていた。また，親しい間柄では，年下の女性の「行くの」，および年上の女性の「いらっしゃるんですか」については地域差がなかったが，その他の表現については初対面の場合と同様に，関東地方の人達の方が中国地方の人達よりも，より適切であると感じていた。このような結果は，先行研究から予測される丁寧さの地域差とは異なっている。前述の通り，方言よりも共通語の方が丁寧であると考えられているため，本研究でとりあげた共通語の待遇表現を丁寧だと感じる度合いは，中国地方の方が高いであろう。ところが，聞き手が適切だと感じる度合いについては，この逆であるという結果が得られた。これはつまり，本研究で設定したようなインフォーマルな場面では，共通語の敬語は丁寧過ぎて違和感を覚えるということであろう。

一方，中国地方においては尊敬語の「れる・られる」の使用率が他のどの地域よりも高い（文化庁，1997）ことから，本研究でとりあげた「行かれるんですか」に対する適切度も，関東地方よりも高いことが予想された。しかし，実際は，中国地方における尊敬語の「れる・られる」の使用率の高さは，結果に影響していなかった。

2．世代差の影響

初対面と親しい場面の各待遇表現のうち，すべての世代間に有意差があったのは，初対面の年下が用いた「行くんですか」と，親しい年下の「行くの」のみであった。その他の表現では，20代と50代が他の世代とは有意に異なっている場合が多く，30代と40代はすべての条件において同じグループに属していた。

また，初対面の相手か親しい相手かという親疎関係，また，年下か年上かという年齢による上下関係を問わず，相手の女性が待遇価値の低い表現を用いることを，世代が上がる（年齢が高くなる）ほど適切だと感じていない傾向が観察された。逆に，待遇価値の高い「いらっしゃるんですか」については，初対面の場合も親しい場合も，20代の適切度が低かった。

先行研究においては，敬語を使いたいと思うが十分に使えていないと思っている人の比率は，若い世代ほど高くなっており，男女ともに若年層ほど敬語の使い分けに対してより敏感であるということが報告されている（文化庁，1995；北原，1995)。これを本研究の結果と考え合わせると，若い世代は敬語能力はあまり高くないが敬語の使い分けには敏感で，その敏感さは，待遇価値の高い表現を敬遠するという形で現れていると言えるであろう。

これは，中・高校生の約半数が，敬語使用はよそよそしくなり，親しい心の交流やざっくばらんなつきあいがしにくくなるなどのマイナスの効果を持つと考えているという調査結果（尾崎，1997）と重なるのではなかろうか。同様に，親しい人に敬語を使うのはよそよそしいと考えている人の割合を，20代から50代までの世代別で見ると，世代が若くなるほどその割合が高くなっている（文化庁，1995)。このように，自分の敬語使用をよそ

よそしいと感じるのであれば，自分に対して敬語を使われることにも違和感を覚えるであろう。

3．男女差の影響

男女間に有意差があったのは，2つの場面でのべ16通りある待遇表現のうち，9つであった。具体的には，発話者が被験者と初対面の間柄である場合には，年下であるか年上であるかに関わらず，女性の方が男性よりも丁寧な表現を適切だと感じる度合いが高いという結果であった。話し手側からの先行研究にも，目上の人に対しては，女性の方が男性よりも丁寧な表現を好んで使うという調査結果（文化庁，1995）がある。女性は，初対面の相手に対しては，自分のことばも相手のことばも丁寧な方を好むと言えるであろう。

ところが，親しい間柄では，発話者が年下の場合も年上の場合も，待遇価値の低い「行くの」という表現に対して寛容なのは女性の方であった。この理由として，相手が同性であるということが考えられる。国立国語研究所の調査（1982）でも，特に女性に顕著な特徴として，相手が自分と同性であれば言葉遣いに対して無頓着に，異性であれば気を配る方に傾くという結果が出ている。これは，自分の言葉遣いについてのことであるが，相手の言葉遣いについても，同様のことが言えるであろう。

また，主効果の有無という観点から分析結果を捉えると，待遇表現の男女差に主効果が表れたのは，発話者の女性が「初対面の年上」である場合と「親しい年下」の場合であった。通常，親疎関係で言えば親しい相手よりも初対面の相手に，また，年齢の上下関係で言えば年上よりも年下の相手に対して，丁寧な表現を要求するであろう。とすると，男女差のあった「初対面の年上」および「親しい年下」の相手というのは，丁寧な表現を要求する度合いが高い条件と低い条件が結びついたものであると言えよう。つまり，発話者の女性が「初対面の相手なので敬語を使って欲しいが，自分より年上だから敬語を使われることには違和感がある」場合と，「親しいから敬語を使われることには違和感があるが，年下だから敬語を使って欲しい気もする」場合の，相手に敬語を求めるかどうかが微妙な条件において，男女差が表れたことになる。これは，男性と女性とで，上下関係と親疎関係のどちらを重んじるかに差異があるためではなかろうか。

ただ，このような言葉遣いにおける男女差は消えつつあると言われている。かつて，女性は，「お」のつけすぎなど過剰な敬語を用いる傾向があった。しかし，今日では，男性と女性の言葉遣いに差はなくなりつつある（国語審議会，1995）。また，男女の表現の違いについての意識調査（文化庁，1995）によると，「男女の言葉遣いに違いがなくなってきている」ことに対して41.2%の人が「自然の流れでありやむをえない」，44.1%の人が「違いがある方がよい」と答えている。これを世代別に見ると，前者の意見は若年層ほど支持率が高く，後者の意見は高年層ほど支持率が高い。このことからも，今後はさらに男性と女性の言葉遣いが類似していく方向にあると予測される。

総　括

本研究では，発話場面における待遇表現の適切さの判断が，「話し手」ではなくむしろ「聞き手」の側に委ねられていると言う認識のもとに，地域差，世代差および男女差の要因を調査した。そして，すべての3要因の影響が観察された。まず，地域差については，待遇価値の低い共通語の待遇表現に対して寛容であるのは，関東地方ではなく，むしろ中国地方であった。また，世代差については，世代が上がるほど，話し手が初対面の相手か親しい相手か，年下か年上かを問わず，話し手の女性が待遇価値の低い表現を用いることを好まない傾向が観察された。男女差については，全体的に女性の方が男性よりも待遇価値の高い表現を好むという結果であった。さらに，興味深い結果は，地域，世代および男女の別なく，親疎関係で言えば「疎」であり，上下関係で言えば「下」であるため，最も待遇価値の高い表現が求められると思われる初対面の年下の女性発話者であっても，「いらっしゃるんですか」という最も待遇価値の高い表現が最適

であるとは受け取られていなかったことである。この結果は，待遇表現の使い分けが，文法的な待遇表現体系の側面からだけでは説明できないことを示唆している。

引用文献

文化庁（1996）新「ことば」シリーズ4　言葉に関する問答集—敬語編(2)—，大蔵省印刷局

文化庁文化部国語課（1995）国語に関する世論調査　平成7年4月調査，大蔵省印刷局

文化庁文化部国語課（1997）国語に関する世論調査　平成9年1月調査，大蔵省印刷局

文化庁文化部国語課（1999）国語に関する世論調査　平成11年1月調査，大蔵省印刷局

第20期国語審議会（1995）新しい時代に応じた国語施策について，国語年鑑1995年版，秀英出版

井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）日本人とアメリカ人の敬語行動，南雲堂

井上史雄（1988）言葉づかい新風景，秋山叢書

加藤正信（1973）全国方言の敬語概観，敬語講座6　現代の敬語，明治書院

北原保雄（1995）敬語意識と敬語表現，国文学，40(14)，6－9

菊池康人（1997）敬語，講談社

国立国語研究所（1957）敬語と敬語意識，秀英出版

国立国語研究所（1982）企業の中の敬語，三省堂

尾崎喜光（1997）「学校の中の敬語」調査から，日本語学，16(13)，34–46

杉戸清樹（1996）敬語行動についての意識，平成8年度国立国語研究所公開研究発表会配布資料

吉岡泰夫（1997）敬語行動と規範意識の地域差，月刊言語，58–65

SUMMARY

The Japanese use polite expressions in diverse ways according to a variety of conditions such as the closeness of the relationship between speaker and listener, their social status or gender difference, where they live, and their positions in the workplace. Previous studies on the appropriate use of polite expressions have mainly investigated the subject from the speaker's point of view. However, it is actually the "listeners" who judge the appropriateness of polite expressions. Therefore, the present study examines the appropriate expression of Japanese politeness from the perspective of the listener.

The research took the form of a questionnaire in which subjects were asked to play the role of listener and to judge the appropriateness of four different levels of expressions; that is, 行くの/ikuno/, 行くんですか/ikuNdesuka/, 行かれるんですか/ikareruNdesuka/, and いらっしゃるんですか/iraQsaruNdesuka/. Of the 548 subjects who participated in the study, 332 were from the Chugoku area (145 males and 187 females) and 214 were from the Kanto area (62 males and 154 females). The subjects were also divided into four age groups of 20s, 30s, 40s and 50s to analyze differences among generations. Four conditions were created by varying the speaker's age and closeness to the listener, e.g., a younger or older female speaker in the two conversa tional situations of a first meeting or between well–acquainted people. In this questionnaire, a female speaker was used in order to stimulate the sense of politeness because, in general, females tend to speak more politely than males. The appropriateness was judged on a five–point scale from "hurts my feelings very much" as 1 point to "does not hurt my feelings at all" as 5 points. The study analyzed the effects of differences in living area, generations, and gender on the appropriate nature of polite expressions.

The results showed that the most polite expression of

いらっしゃるんですか/iraQsaruNdesuka/was not the most accepted expression by subjects as listeners, even in the condition of a first–met and younger speaker who is naturally expected to use the most polite form of address. The most accepted expression was 行かれるんですか/ikareruNdesuka/, which has a lesser degree of politeness than いらっしゃるんですか/iraQsaruNdesuka/. This finding suggests that the appropriate use of polite expressions cannot be wholly explained by the systematic principles of linguistics that concern expressions of politeness. In the condition of well–acquainted speaker and listener, both 行くんですか/ikuNdesuka/, and 行かれるんですか/ikareruNdesuka/were the most accepted expressions. The more familiar expression of 行くの/ikuno/ was least accepted, even when a well–acquainted older speaker used it.

The judgement of appropriateness in polite expressions by subjects as listeners was affected by area of residence, age and gender. Where geographical area was concerned, subjects from the Chugoku area were more tolerant of the familiar expression of 行くの/ikuno/, than were subjects in the Kanto area who showed a marked preference for the more polite expressions. Regional discrepancies such as these may arise from differences between dialects and standard Japanese. Subjects whose dialects are characterized by polite expressions will tend to prefer the more polite forms of the standard language, whereas speakers of less formal dialects will feel at home with that dialect's more casual terms of address. Subjects as listeners showed gender differences regarding the conditions of the "first–met older" and "well–acquainted younger" speakers in which female subjects were more likely than male subjects to judge all polite expressions as most appropriate. There were no gender differences in the conditions of "first–met younger" and "well–acquainted older" speakers. The subject's generation strongly affected the judgement of the appropriateness of polite expressions. For example, subjects in their forties were inclined to dislike the familiar expressions used by the speaker regardless of the speaker's age and closeness. By contrast, subjects in their twenties said they were not comfortable with the use of the polite expressions.

The Science of Reading, Vol. 44, No. 2 (2000)

翻訳

読みについて(6)*

アリゾナ大学　ケン・グッドマン　**
加藤学園暁秀初等学校　横　田　玲　子（訳）***

（Ⅵ）文面はどのように機能するか

（前号よりつづく）

単語の頻度

1900年代最初の四半世紀に，教育を科学的に見直そうという動向が強まった。読みの指導において，科学的な基礎を見つけることに関心を寄せた人々は「読みの法則」を見い出そうとし，その法則に合う究めてコントロールされた教材を作り出した。彼等は完璧な教材を作れば，最小限に教育された教師らのかかえるハンデキャップを克服できると考えた。この人々の指導者であったエドワード・ソーンダイクは行動心理学に基づいて，いくつか学習の法則というものを作りだし，読みの指導をコントロールできる方法を探した。そしてある単語は頻度が高く用いられ，ある単語はめったに使われないことを発見し，必要なことは語意を操作することだと考えた。読みは，単語を学ぶということであるなら，幼い学習者らは，最も使用頻度の高い単語から学ぶべきだということになる。そこで彼等は，膨大な数の国語のテキストを集め，一つ一つ単語を数え，頻度の高い順からのリストを作った。これにはニューヨーク州バッファロー新聞の日曜版のいくつかの連続記事も用いられた。コンピューターができる以前の大作業だ。

ソーンダイクは「教師の単語帳（The Teacher's Word Book)」というタイトルのリストをまず出版した。ウイリアム・グレイとその同僚らは，以下のことを前提とした新しい教科書を作成するためにそのリストを使用した。

* 最も使用頻度の高い単語のみを紹介することから始める。
* 学習者が，その単語を確実に学べるように幾度も繰り返す。
* 頻度の低い単語を，頻度の高い単語に置き換えられるところは常に置き換えて，頻度の高い単語を使用する。

彼らは入門的読本という新しい様式の教科書を作り出した。その本は挿絵が示す物語をわずかの数の単語で語ったものである。出版者らはより少ない単語で，教材を作成することに精を出し，さらに前段階の前入門的読本をも作り出していった。See Spot Run はその前入門的言語の典型的な一例といえよう。

だが，単語の頻度というものは，文面の中で，単独に起こる現象ではないのである。この「科学的」研究者らは文章の表現を決定づける要因を認識していなかったのだ。つまり，彼らは単語の頻度を文章の困難さの結果として考えており，文章が要求する結果として生まれたものとは考えなかった。私自身が行った単語の頻度に関する研究では，約25の単語が内容全体の40%を占めるという少ない単語で構成された文章で言うと，例えば the は，その10%を占めることがわかった。これはほとんどの名詞が冠詞を必要とするからである。（限定された名詞には the がつき，ほとんどの名詞は限定されているから，不定冠詞の a よりも，the の方が，より一般的に使用される。）

---

* On reading (6).
** GOODMAN, Ken (University of Arizona)
***YOKOTA, Rayco (Translator, Katoh Elementary School)

どんな物語においても，頻度の高い単語の半数は，the のような限定詞，前置詞，接続詞，助動詞，連結詞（主に be 動詞）そして，代名詞のような機能語である。これらの単語はソーンダイクのリストにも挙げられているが単語自身に意味があるわけではなく，文脈の中で学ばれるのが最も好ましい。

物語の中で，残りの半数の単語で頻度の高いものは，疑問形で使われる単語であり，これらは文脈の筋やその物語の登場人物によるのである。そのいくつかは，ソーンダイクのリストではきわめて下位にあるかもしれない。一人称の物語では，I，my，me そして mine が多く用いられる。もし主人公が女性ならば，she，her，hers が多く用いられるだろう。我々が行った研究の一つでは，Peggy という羊をコヨーテから守る牧羊犬が主人公であった。この物語で最も頻度の高かった単語は，何だか察しがつくだろう。sheep や coyote は頻度別リストにはない。Ewe（雄羊）という単語もリストにはない。ewe をどう発音するかわからない人は多くとも，この物語を読んでいけばそれが何かはほとんどの人が理解する。一方頻度の低い単語のほとんどは，文中に一回しかでてこない。それらは，内容を理解する上で大して重要ではなく，読み手はその単語の意味を接語法上，また内容上，簡単に推測できる。

次のページの表は我々が研究に用いた３つの物語の単語の頻度を示すものである。(表の説明をすると，ストーリー53においては，のべ2030の単語645種類の単語が用いられている。ストーリー59では，のべ3667単語952種，ストーリー60では，のべ4208単語883種というわけである。）単語の頻度のみを見て，物語の筋や，登場人物の格好の何がわかるだろうか。

この３つの物語に共通して頻度の高い12の単語は，the，and，to，a，of，in，it，that，at，he，for，on であった。it と he は代名詞であり，残りはそれぞれの物語の構成を形づけるのに，役立つ機能語である。３つの物語のこのリストの中で，頻度の高い動詞，名詞というものは，その物語の筋によって決まってくるものである。ストーリー59の牧羊犬の話では，Peggy（犬の名前）sheep，coyote，coyotes，そして band（首輪の縄）といった名詞が頻度が高い。she と her はそれぞれ105回用いられたが，これは Peggy という主人公が雌であるからだ。一方 said はストーリー53と69においては最も頻度の高い動詞であるのだが，ストーリー59のリストには載っていない。というのはストーリー59の主要な人物は動物であるため，会話はほとんどないからである。形容詞でこのトップ25の頻度の表に登場するのは typical のみである。ストーリー53の話の主要な筋の中心になる話題は Mr. Barnaby thinks Andrew is a typical baby. ということであり，下線を引いた単語はこの物語の中で頻度の高いものである。

英語というものは豊富な語彙を持っている。これはその語源に複数の言語を持つというのが理由の一つだ。例えば，ラテン語にルーツを持つ動詞の多くは，ゲルマン語の同意語を持ち，動詞に不変化詞を伴って用いられる。以下はその例である。

construct/build up，compose/make up，decompose/break down，omit/leave out，conclude/finish up，discern/make out，continue/carry on，inspect/look over. そして多くの選択肢があるため，我々は同じ単語を繰り返すのをさける傾向にある。

そしてストーリー60（第５章の「毒」に関する部分も参照されたい）の冒頭の部分では主人公が家の中へ入っていく動きを表わす多くの単語や句が用いられている。つまり，drove，approached，opened，coming，parked，went up，take steps，got to，crossed，pushed，through，went across などがそうである。これらの単語の一連が結合力のあるつながりとなり，文章の意味的構成を作り出す。島が背景となるある物語においては，カヌーを意味する12種類の単語が用いられ，その物語の中では大変目立っているが，カヌー（canoe）そのものは２回しか用いられていない。

次ページの私の表では示されていないが，異なる単語の半分以上は，３つの物語の中でどれも一度しか文章に出てこない。これらの単語はソーンダイクのリストの中

Most Frequent Words in Three Stories												
Rank	Story 53[1]				Story 59[2]				Story 60[3]			
		N	%	Cum.		N	%	Cum.		N	%	Cum.
1	The	82	3.9	3.9	the	370	9.9	9.9	the	259	6.0	6.0
2	I	80	3.9	7.8	and	116	3.1	13.0	and	166	3.8	9.8
3	a	65	3.1	10.9	to	110	2.9	15.9	he	137	3.1	12.9
4	and	52	2.5	13.4	she	105	2.8	18.7	I	123	2.8	15.7
5	he	51	2.4	15.8	her	105	2.8	21.5	to	117	2.7	18.4
6	said	51	2.4	18.2	of	100	2.6	24.1	it	90	2.0	20.4
7	to	48	2.3	21.5	a	76	2.0	26.1	his	85	1.9	22.3
8	you	31	1.5	23.0	was	62	1.6	27.7	was	82	1.9	24.2
9	Mr.	28	1.3	14.3	Peggy	40	1.0	28.7	a	78	1.8	26.0
10	my	28	1.3	25.6	it	36	.9	29.6	of	73	1.6	27.6
11	of	28	1.3	26.9	sheep	34	.9	30.5	in	58	1.3	28.9
12	baby	26	1.2	28.1	in	33	.9	31.3	Harry	45	1.0	29.9
13	Barnaby	25	1.2	29.3	for	33	.9	32.1	on	36	.8	30.7
14	at	24	1.1	30.4	had	31	.8	32.9	you	36	.8	31.5
15	was	24	1.1	31.5	as	31	.8	33.7	at	33	.7	32.2
16	Andrew	23	1.1	32.6	from	27	.7	34.4	that	31	.7	32.9
17	in	22	1.0	33.6	on	27	.7	35.1	me	30	.6	33.5
18	his	20	.9	34.5	coyote	24	.6	35.7	but	29	.6	34.1
19	it	19	.8	35.4	that	22	.5	36.2	him	29	.6	34.7
20	on	17	.6	36.2	at	21	.5	36.7	up	29	.6	35.3
21	as	14	.6	36.8	were	21	.5	37.2	there	28	.6	35.9
22	but	14	.6	37.4	he	20	.5	37.7	said	28	.6	36.5
23	for	14	.6	38.0	his	20	.5	38.2	now	26	.6	37.1
24	that	13	.6	38.6	down	19	.5	38.7	for	25	.6	37.6
25	typical	13	.6	39.2	into coyotes band	18 18 18	.4 .4 .4	39.1 39.5 39.9	Ganderbai my not out	25 25 25 25	.5 .5 .5 .5	38.1 38.6 39.1 39.6

[1] My Brother Is a Genius　[2] Sheep Dog　[3] Poison

3つの物語における使用高頻度の単語一覧

で頻度が低いとか高いとか示されるかもしれないが，一度しか物語の中で使われていないのなら，筋を理解するのに主要な単語となるはずがない。

つまり私が述べたいのは，表面的であり予測しにくい文章では，語彙がコントロールされる一方，実の場で真実性のある文章は，文章そのものが語彙をコントロールするということである。反対に次の章で述べるように，一般的でない単語でさえ，与えられた内容の中で，予測可能となるのである。

語彙ー文法レベル：接語法の手掛かり

読み手や書き手は意図した意味を表わす文章の文法を，構成するためにある手掛かりを用いる。いくつかの文法組織が，その手掛かりを読み手らに提供している。文法組織はある程度，どの言語においても共通であるが，それぞれの言語はその組織を異なる方法で用いており，異なる重要性を示している。ここでは，パターン，パターンを示す記号，そしてルールという3つについて，観ていくことにしよう。

パターン

文章のパターンの重要性については，すでに述べたが，英語ではこの文章パターンというものはかなり固定的である。つまり，主語は動詞の前，形容詞は名詞の前，といったパターンである。わずかいくつかの要素が流動的であり，次のような副詞はその例である。

He devoured the delicious food <u>ravenously</u>.
彼はごちそうを，むさぼるように食べた。
<u>Ravenously</u>, he devoured the delicious food.
むさぼるように彼は，ごちそうを食べた。
He <u>ravenously</u> devoured the delicious food.
彼は，むさぼるようにごちそうを食べた。
He devoured <u>ravenously</u> the delicious food.
彼は，ごちそうをむさぼるように食べた。

英語の文章のパターンは，比較的，固定されているため，最小限の手掛かりだけで，我々はすぐに確信を持って予測を立てられる。だから，Glis was very fraper. という文章も一目見ただけで，そのパターンを言い当てることができるのである。

書き手はまず，意味を構成することからとりかかる。そして節が意味を表現する最小単位である。小学校の時に先生が文章というものは一つのまとまった考えを示すとあなたに教えたことは間違っているのだ。一つの文章というものは，一つかそれ以上の何らかのまとまった考え（節）を，包含することが可能でありそれらを相互に関連させ，内容の意味をうまく表現するためにその複数の考え（節）を連結させているのである。それぞれの節はそれ自身で一つの構造を持つ主語の変形であり，予測可能である。これらの節によって作り出される意味は，深層レベルに存在するのである。

著者が作り出す文章は，読み手がその文に存在する節に気付き，意味を表わすためにどのようにその節が結合しているかがわかるように，接語法に従ってひも解かれなくてはならない。大人の読み手は意味をわかっていくプロセスでこれを無意識のうちにおこなっている。とはいえ，あなたがこれは大人の複雑な文章における特色であると，誤解することがないように，子供のための物語から文章のパッセージをひも解いてみるとしよう。

"If you stay home to do my work, you'll have to make butter, carry water from the well, wash the clothes, clean the house, and look after the baby," said the wife. "I can do all that," replied the husband.

上文訳

「もしあなたが家にいて，私の仕事をするというなら，バターを作り，井戸から水を運び，服を洗い，家の掃除をし，そして赤ん坊のめんどうをみなくてはならないわ。」と妻がいった。「すべてできるさ。」夫が答えた。

これはカナダの小学校3年生用の教科書の中にある，よく知られた民話「The Man Who Kept The House」（家事を引き受けた男）の一部分である。この文章の会話のあとの，引用を示す節において複雑な文章が用いられていることに注目していただきたい。つまり，said the wife，これは通常の主語—動詞という英語の順序が，逆

になっている。

以下はこの文章に使われた節と，内容を表わす中で表現された複雑な組織の内訳である。

If you stay home	(if) you stay (at) home
to do my work	(you) (inf) do work (work is mine)
you'll have to make butter	(then) you'll have to make butter
carry water from the well	(then) you'll have to carry water from the well
clean the house	(then) you have to clean the house
and look after the baby	(then) you'll have to look after the baby

この一連の文章はIfが文頭の節で始まっているため，文章の表面上には表われないthenが暗示されている（if x, then y，もしxならばy，というパターン)。2番目の節の動詞は最初の節の動詞がstayであるために不定詞to do my workとなっている。これは“for the purpose of”（その目的のために）とか，“in order to”（～のために）という意味を持つ。つまりYou stay home in order to do my workという文なのである。その暗示されたthenにつづくのはyou'll have to make butterで始まる一連の節である。だが結合するルールが書き手によって用いられているため，you'll have toが最初の節を除いてあとの4つの並列する節から省かれている。並列するというのはそれらの節が同じ始まりであり，目的語が動詞に続く接語法の構成が同じであるということである。

この例は不定詞を分散して用いることを禁ずるのは間違えである，ということを示しているので私は気に入っている。make，carry，cleanそしてlookは，すべて不定詞であるが，通常，不定詞として使用されるtoはこの場合，最初の節，You'll have to make butterのところでしか用いられていない。

我々の研究において，多くの読み手はbutterのあとで次を読む前に，一呼吸おいた。彼らはなぜ次の言葉がcarryという動詞であるのかを理解しようとしているようだ。その時点では，動詞で始まる並列的な節のシリーズを，収容することができるこの文の構成を読み手はまだ捕えていないのかもしれない。そしてこの節のシリーズが読み手によって捕えられた時，読み手のイントネーションから，これらの節をひもとくための適切な接語法の構成を彼らが選定したことを我々は知るのである。

パターンを示す記号

機能語と文法上の（語尾変化を持つ）単語の語尾は，その文章のパターンを示している。「Mardisan Giberter」の最初の部分で意味を持つ言葉（内容語）を除くと，次のような文章になる。

____was very____. She had ____ en ____ 's ____. She didn't ____ a ____ for him. So she ____ ed to __ a _____ for him.

上記の文章で残っているのは，機能語と代名詞である。これらは，どれもその単語自身が意味を表現しているのではないが，意味のある部分を作りだし，内容語が欠如していようと，微妙な意味の手掛かりを提供している。これらのパターンを示す記号は，聞き手や読み手が予測を立てるため，またその文章に何が入ってくるかの推測をするため，そして彼ら自身が構成している最中の文章に文章のパターンを割り当てていくために，用いられている。

記号を示す単語の第二の組織は，接辞語と単語自身の変化形によって成り立つ。これは，英語以外の言語でよく用いられるが，以下に示すように我々も英語で用いている事柄である。

* 動詞の時制を示す記号（s, ed, ing, en）
* 名詞の複数形所有格を示す記号（s, 's, s'）
* 人称代名詞の格変化（I, me, my, mine；he, him, his）

名詞が使われる状況いかんで，その名詞が異なる形を用いる言語とはちがい，英語では文章パターンの中の名詞の位置が，聞き手や読み手にその機能を伝える。文章のパターンを見付け出すのに，我々はそんなにたくさん

の手がかりを必要とはしないのだが，文面の言語は時として余分に長くなることがある。たとえば，The boys are eating their sandwiches now，という文章を考えてみよう。複数を表わすのに，4つの手がかりが用いられている。つまり，boys の s，be 動詞の are という形，複数人称代名詞所有格の their，そして sandwiches の s である。文章のこの冗長は，同一の情報にさらなる手掛かりを与え，言語の曖昧さを減少させる一つの方法である。

ところが，否定文となると，我々は最小限の手掛かりしか与えられない。つまり二重否定や三重否定は，英語においては良くないとされている。だから我々は，I don't have any paper，或は，I have no paper，というべきであり，I don't have no paper，とはいわないのだ。ならば我々はどうやって，否定内容を確かめることができるのだろう。否定文における短縮形はさらに文章を短くさせるため，I can go，と I can't go，の違いはさらに少なくなってくる。ある方言では，この can't の/t/は発音されないため，can と can't の違いは，can は曖昧母音の a を持ち，can't は can より，強いアクセントが置かれるので，曖昧ではない完全な母音の a を持っているということになる。

事実は何かというと，我々は聞き手や読み手として意味を構成するのにとても優れているため，多くの手掛かりを必要としないということだ。内容が理解可能な範囲において，我々は予測や推測するために可能な手掛かりの中から選択してそのいくつかを用い，残りの手掛かりを確認や決断のために用いている。実の場において真実性があり，文法が整って意味を持つ文面というのが，曖昧であることはめったにない。もし曖昧だとしたら，それは著者は自分が言おうとすることが，自分ではよくわかっているために，曖昧さに気づかなかったのだろう。

ルール

言語を話すことを学ぶ中で，我々は文法のルールを学んでいる。だが，そのルールは目には見えないので，模倣のものから学ぶことはできない。そこで，我々はそのルールを発明しつつ，より良く理解されるために家族やコミュニテイーの中で，会話を重ねる。子供達は読むことを学び始めるころには，すでにかなり熟達した文法家になっているのである。

読み手のミスキューは，彼らの文法のルールが本の著者のものとは同一ではない可能性があることを示している。先の章で「The Little Brown Hen」の読みを紹介した4年生のアフリカ系アメリカ人の少女，アンジェラは，著者が内容を変えずに用いることができたであろうルールを用いたミスキューを見せている。

He stopped by the feed bin.\ (C) could "If I should find the hen, she'll be hungry," He thought (,) (C) ^ He so he set down his fishin(g) equipment and scooped up \corn (and) filled his pockets. the He put corn in his right pocket and (corn) in his left pocket.

この文の中で，アンジェラは著者とは異なった文法のルールを用いている。また彼女は，著者が用いることができた単語を挿入して読んでいる。一行目で彼女は "should" のかわりに "could" と読んでいる。著者のここでの仮定法の使用は，田舎の少年の話にしては少々変である。アンジェラは，より動詞句らしくなるよう，"If I could," と読んだが訂正した。次の行では単語は変えずに，節と文章をアレンジし直した。つまり hungry のあとで文章を終わらせ，he thought, so の so を前に持って来ることで，He thought so と，その機能を変えさせている。

そして次も He で始まる文章にしている。アンジェラは "corn" のあとの "and" をぬかしたが，次の "filled" という動詞を読んだあと，彼女は自分で訂正した。続く文で "corn" の前に "the" を挿入しているのは，一般的な名詞の前には限定詞を置くというルールにかなっている。ここでは "corn" は量を示す名詞なので不特定なものの場合，この物語の著者がここでそうしているように，限定詞なしでも使うことができる。アンジェラは，話の中ですでに "corn" が出てきたことを正しく思いおこし，"the" を挿入して，不特定なものから特定なものへ変えたのだ。アンジェラが正しいのであって著者がまちがっている！続く節で "corn"

をぬかしているのも，彼女は継続する節においては，冗長する要素は省略できるというルールを用いている。

私がアンジェラのこの読みの分析を紹介したのは，あなたに私の英語文法の知識で感動していただきたいのではなく，アンジェラの知識に感動していただきたいからだ。この田舎の少女は，英語のルールをとてもよく知っていたので，著者の用いた文法を扱うのみならず，自分が学んで身につけた知識を使って，自分で文章パターンを創り出している。繰り返して言うが，これはアンジェラが言語を操作するときに，常日頃用いる知識であって，言語に関する言語学者の知識ではないのである。あなたと私は，アンジェラが英語の文法ルールを用いて何を行ったかについて，言語学の専門用語を使って話し合うこが可能だ。彼女の知識は優れた力を持ち，かつ生産的である。それが表面に表われて我々に語ることはないだけだ。

意味，実用的レベル

もう一度この本の中心となる前提に戻ろう。つまり意味とは読み手が文面と対応する中で構成されるということである。だが文面のどんな性質が意味の構成を可能にするのだろうか。答えは単純であり，かつ複雑だ。単純に答えると，実の場で真実性を持つ文面は，それ自身が意味を持つ。だがこれは文面そのものに意味があふれているとも受け取られ，誤解を引き起こす。そうではないのだ。意味は書き手と読み手の中に存在する。

では，読みの中で，文面とはどのような形で現われるのであろうか。実の場において真実性をもつ文面は理解可能である，というかわりに次のようなことが言えるだろう。つまり，それは意図された聴衆のために意味を成す可能性を持ち，十分な関連知識を用いて，読み手が文面から意味を作ることが可能な完成された記号論的な描写ということだ。だが文面は意味を描写するだけでなく，意味によって形づけられている。あなたや私，そして我々の言語使用の先駆者達は，言語が我々にとって意味を共有することが可能なように言語というものを社会的に構成させてきた。どのレベルにおいても，社会的コミュニケーションの中で役立つためのニーズによって言語は形づけられている。口語であれ書かれた言語であれ，それが意味を共有するための我々のニーズによってでき上がった確かな慣習に従っているなら，我々はそれを理解することができるのである。

この章の残りで，書き手の意味がどのように理解可能な文面を形づけるかについて述べたいと思う。文面は同時に3つの種類の意味を描写する，とハリデーは述べているが（1985）彼のこの考えは我々にとって役に立つ。その3つを彼は，経験的意味，人間相互間の意味，そして文面どおりの意味，と呼んでいる。

経験的意味

我々の経験や，経験から発展させた考えを描写するのが，最も明解な意味である。もし私が「私の机は白い。」と言ったとすると，私の意味とあなたの意味はそれがいったい何のことか限定しようとする。私とあなたは「白」と「机」についての経験を共有し，私が自分の机か，少なくとも私が使っている机のことを言っていることがあなたにはわかっている。だがもし「私の机は美しい。」と言ったら，私は自分の机を美しいと見ていることはあなたにわかっても，なぜそう思うのかという机の特徴についてはわからない。さらに私がその美しい机についてもっと語るうち，実は私は皮肉で言っていることをあなたは発見する。「私は美しい机を持っている。少なくとも私はその机は美しいと思っている。だが2年前から，それは仕事の山の下に姿を消した。」

人間相互間の意味

人は経験を共有するためだけに言語を用いるわけではない。経験におけるその人の態度，感覚，そして反応もまた共有し，同様に考えも共有する。

次に紹介するのは先に挙げた「家事を引き受けた男」の中の別の部分をベッツィーが読んだものである。（ベッツィーのこの物語の読みのミスキューは，グッドマン，ワトソン，ビュークによる「ミスキュー目録」1987，に収められている。）

"Poor baby, you must be hungry," said the woodman. "I'll make some porridge for you. I'll light a fire in the fireplace, and the porridge will be ready in a few minutes."

ベッツィーは"poor baby"というところを，あたかも本当に赤ちゃんに向かって言うように読んでいる。このことは彼女が，意味を正しく理解していることを示している。また，この部分は人間相互間の意味，つまり，「自分（赤ん坊の父親）はこの赤ん坊がとてもかわいそうに思う。」という意味を持っている。その赤ん坊が貧しい（poor）のではなく，父親は泣いている自分の子供に対し，自分の感覚を表現しているわけだが，ベッツィーのイントネーションは，それをきちんと理解していることを語っている。"Poor baby"という言葉は，別の意味合いで，赤ん坊ではない他者に向かって，軽い同情の念を表わしたり，或は人の嘆きをあざ笑ったりするときの表現にも使われる。

"in a few minutes"（すぐに）を"in a flash"（ぱっと）に替えているのはベッツィーが，このパラグラフの中でまだ，人間相互間の意味を保っていることを示している。彼女は，この父親が赤ん坊をあやそうとしているのを知って，より実用的でふさわしい表現を用いたのだ。これに反して，著者はごく普通の表現を用いたので，ベッツィーはミスキューのあと，見直すようにしてすこし間をおき，訂正したのだった。彼女は単に言葉を認識しているのではなく，意味を捕えながら読んでいる。

文面どおりの意味

3つ目の意味は少しわかりにくいかもしれない。文法のみでなく，意味というものも，文面の構成によって表現される。a と the については接語法上は同価値のものであることは先に述べたが，この2つの違いというのは意味構成上にある。つまり the は限定された名詞を示し，a は不特定の名詞を示す。ベッツィーが"a fire"を"the fire"と読み替えたのは，意味を作りあげる上で，彼女が文面の特徴を用いていることを示している。もし，その"fire"をおこす"fireplace"（暖炉）が，限定された"the fireplace"だとしたら，なぜ"the fire"とならないのだろうか。

ハリデーとヘイサンは，内容というものがどのようにして結合しているかについて，多くの複雑な方法を研究したが，その研究の一つは「省略」ということについてであった（1976）。ベッツィーが読んだこの文面においては，著者は同一文章の中での節の連続で，二番目の"I'll"を省略しなかった。つまり"I'll make some porridge for you and light a fire……"としなかったわけである。だが，著者が"I'll"を省略しなかったのでベッツィーは，そのあとも"I'll"は省略されないだろうと予測して，"fireplace"のあと，"I'll"を挿入して読んだ。彼女が予測したもの（並列する節のカンマのあと，きっと彼女は"I'll make"か"I'll cook"が来ると思ったにちがいない）を見つけなかった時，彼女は戻って自分の読みを訂正した。

これらの意味組織の同時性

文面は上記3つの意味を同時に表現している。結合力のある一つの内容に，経験的，人間相互間，文面どおりの意味を持ち込んでいる。著者は文面どおりの意味が表現されるように，適切な接語法にかなう構成を用い，人間相互間における微妙な意味や経験的な意味が表現されるように，ふさわしい言葉と形式を選ぶのである。

次の文章は，私が購読している新聞の数ヵ月前の記事の始めの部分である。

Washington–The United States assigned 54,000 troops to the Persian Gulf and put 15,000 more on standby yesterday to back up a warning to Saddam Hussein that another attack on Kuwait would result in certain defeat.

Moreover, administration officials hinted that if the Iraqi leader repeated his actions of 1990, the United States will not "repeat the mistakes of the past" and let him off the hook. They even suggested that it might not take an actual invasion of Kuwait to trigger a U.S. response. (Arizona Daily Star, 10/10/94, p. A–1)

ワシントン—合衆国は，サダムフセインに対し，次回

のクウェイト攻撃は確かな失敗に終わるだろうと警告し，その支援として，昨日ペルシャ湾に54,000の軍勢を割り当てると共に，15,000以上の軍勢の準備した。

さらに，政府の官僚らは，イラクの指導者が1990年の彼の行動を繰り返すなら，アメリカ合衆国は彼をわざと逃がした「過去の過ちは繰り返さない」ことをほのめかした。彼らは，クウェイトの実質的な侵略という行動ではなくてもアメリカの引きがねを引くことになるかもしれないとさえ，示唆した。

（アリゾナデイリースター　10/10/94, P.A-1）

新聞の記事は，事実に基づいているので原則的に，経験的意味を運んでいると考えるのが一般的である。だが，ここでは3つの意味がどれもよく表わされている。書き手はいくつかのことを暗示的に，そして経験的に表現している。軍勢の数がその例である。それらはペルシャ湾に割り当てられた—だがそれは海の主要部全体なのか，それとも局部的なのか？割り当てられたというのは，すでにもうそこに配備されたことを意味するのだろうか？それとも，配備されているところなのか？配備命令がでたところなのか？フセインは，名前の繰り返しを避けるために，イラクの指導者と呼ばれている。だが読み手はその指導者というのが同一人物で，彼というのもフセインをさすことをすでに知っていなくてはならない。読み手は合衆国というのが，軍勢を割り当てた政府当局の幹部の権力者の内であることを推測しなければならない一方，合衆国はあたかも人物のように扱われている。我々はまた，準備したの主語は同じ政府当局者らであることを理解しなければならない。

いくつかの動詞はかなりの部分，たとえば“官僚らは，ほのめかした”というところなどは，人間相互間の意味を運んで来ている。彼ら（同一の官僚だろうか？）はまた，示唆した。これらの名前が明記されていない政府当局者らが（この政府というのは，アメリカ合衆国の大統領の政府であることを推測しなければならない，）明言したとか，言ったとかいうのではなく，ほのめかしたり，示唆したりしたという，この新聞の短い報道を視覚的に思い浮かべることができるだろうか。動詞の警告する（warn）は，名詞の警告（warning）の変形として使われた。だがこの動詞を名詞に変える，という文面通りの意味における方法は，支援（back up）という単語には適応されず，backed up とは，書かれていない。誰が警告されたのか？誰によって？警告の内容は何なのか？警告が次回の攻撃を含めるなら，我々は以前にも攻撃があったと推測できるのだろうか？またそれは，何年か前の攻撃のことなのか，それともごく近年の別の攻撃のことなのか？警告の支援のため軍勢を割り当てるというのは具体的には一体どうすることなのか？これら全て，読み手の推測に残されている。確かな失敗もまた，失敗は確かであろうという警告側の視点を表現した人間相互間の意味である。

3つの意味をほどよくブレンドさせているほか，この記事の書き手はイディオムや口語的表現を数多く用いている。「合衆国の政府」の意味で用いられている「合衆国（the United States)」は，提喩法（synecdoche）と呼ばれる口語的表現である。put on standby, back up a warning, off the hook, trigger a response など全て，意味の共有に頼った隠喩である。たとえば，trigger a response（引き金を引く）の trigger（引き金）はガンの一部であり，この隠喩は，その引き金が引かれるということは同時にガンが火を噴くことを意味し—フセインの行動は何の論議もなしに自動的に引き金を反応させることになる。「off the hook」は，釣からくる隠喩である。なぜここでフセインが魚の扱いを受け，またどのように彼は釣り上げられた釣り針を外されたのか？読み手はわかっているか，想像するしかない。

書き手が二番目のパラグラフを Moreover（さらに）で始めるという決定は重要なことだ。ハリデーは，どんな構成であれ最初に語られる要素は重要性を持つ，と述べている。だから Moreover（さらに）は読み手に次のパラグラフは最初のパラグラフと強く関係し，それ以上に重要な内容を提供することを示す手掛かりになっている。それゆえに読み手の期待を作り上げる。

書き手の言葉の選択から判断して，書き手は明らかに，読み手が事前の出来事が危機を作り上げていることを知っていると仮定している。4つ後のパラグラフで初めて，アメリカの国連大使がフセインの行動が危機を引き起こしたと述べている。文面の手掛かりは，クウェイト侵略に至らずともどんな行動がアメリカの引き金を引かせるのか，またそのとき一体アメリカはどのような行動に出るのか，それら一切を読み手の想像にまかせている。書き手はこれらの疑問の答えを知らないかのようであり，これは賢明な書き方である。

私は新聞記事の書き方の批判をするつもりはない。ここで論証したいのは，単に読み手に情報を与えるだけではなく，書き手の信念や態度に影響を与えたこと，そして読み手がすでに知っていることや信じていることを利用しながら，ある確かな目的を達成するために，書き手はどのように文面を構成するかということである。3つの意味は織り合わさっており，イディオムや隠喩の効果的な使用は，読み手を文面との対応（Transact 第一章，訳語解説参照）へと導く。またこの書き手は，読み手の感覚を意識している。どこまでを明らかにし，どの程度を読み手の推測に任せるかはすでに決定済みである。そして，読み手がどれほど活発に，その人自身の文面，構成，意味というものを作り上げなくてはならないかを，我々は観察することができる。

総 括

私がこの章で述べたことは，文面は我々がその対応において十分な言語学的，また認知的知識を我々が用いることを仮定して，3つの意味を提供するように構成されているので，読み手はその文面をわかることができるということである。読んでいる間，我々は，記号組織，言い回し，文法，そして3つの意味の表現，これらのことを同時に取り扱っており，きわめて多忙なのである。

マーガレット・ミークはミスキュー分析を用いて，文面は理解可能に構成されているばかりでなく，読み手は読みによって読みを学んでいるということを実際に我々に教えていると指摘している（1988)。意味への探究は，文面をわかるために必要な手だてを見い出し掘り下げていく機会を，その必要性とともに我々に提供している。つまり我々は具体的に文面をわかっていくことを通して，その効率性や効果を深めている。文面が実の場における真実性を持ち，我々がその文面をわかりたいと思っているなら，我々は読みによって，読むことを学ぶのである。

編集部注

(1) 本論文は Ken Goodman 著 “On Reading”（Scholastic Canada Ltd. 発行，1996年）の一部を翻訳したもので，本誌第44巻第1号42ページから続くものである。

(2) 日本読書学会は，Ken Goodman 博士と Scholasic Canada Ltd. が翻訳掲載の許可を与えられた事に対し感謝の意を表する。

日本読書学会会則（1989年７月改正）

第１章　名称と事務所

第１条　本会は日本読書学会と称する。

第２条　本会の事務局は当分の間筑波大学学校教育部国語教育研究室内に置く。

第２章　目的と事業

第３条　本会は読書に関する科学的研究を志す者の連携協力によって日本における読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを目的とする。

第４条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

1．会員の研究促進を目的とする大会の開催。
2．会員の共同研究を目的とする部会の開催。
3．会員の日常の研究・実践活動の情報の収集ならびにその紹介。
4．読書及びその指導に関する内外諸文献の調査ならびにその紹介。
5．内外における関係諸団体との緊密な連絡。
6．会員の研究業績その他を掲載する機関誌の編集。
7．会員が本会の組織運営に関して協議する総会の開催。
8．その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第３章　組織と運営

第５条　本会の会員は正会員，名誉会員および賛助会員とする。

正会員は本会の趣旨に賛同して会員となることを申し込み，常任理事会の承認を得，所定の会費を納入したものとする。

名誉会員は本会の運営に功労のあったもの，または本会の事業に財政的援助をしたもので，理事会が推薦したものとする。名誉会員は正会員と同等の権利を有する。

賛助会員は本会の趣旨に賛同して，賛助会費を納入したものとする。

会員であって会員の義務を怠り，または不都合な行為をしたものは除名されることがある。

第６条　会員は本会が営むあらゆる事業に参加することができ，また本会の機関誌その他の出版物について無料配布または優先的配布をうけることができる。

第７条　本会の事業を運営するために次の役員を置く。

1．会　　長　　１　名
2．副 会 長　　１　名
3．常任理事　　若干名
4．理　　事　　若干名
5．監　　事　　２　名

第８条　理事及び監事は，正会員および名誉会員が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは，前記の互選によるもののほか，正会員の内若干名を指名して，理事に加えることができる。

第９条　理事は理事会を構成し，本会の事業執行の責任を負う。

第10条　副理事長は理事の互選により選出し，理事長の任期終了とともに次期理事長となる。

理事長は会長として本会を代表する。副理事長は副会長として会長を補佐し，会長事故あるときは，その職務を代行する。

第11条　常任理事は理事が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは，前項の互選によるもののほか，理事の内２名に限り指名して，理事会の承認を経て，常任理事に加えることができる。

常任理事会は理事長，副理事長及び常任理事によって構成する。

常任理事会は理事長の委託をうけ，本会の通常の運営について常時執行の任にあたる。

第12条　監事は，本会の会計を監査する。

第13条　役員の任期は３年とし，４月１日から３年後の３月31日までとする。新役員は，旧役員の任期が最終となる年度内に，選挙によって決定する。

第14条　本会に名誉会長を置くことができる。名誉会長は理事会の推戴による。

第15条　本会の事業を遂行するために事務局に次の職員を置く。

1．事務局長　　１　名
2．書　　記　　若干名

事務局職員に関する規定は別に定める。

第16条　本会に支部を置くことができる。支部に関する規定はこれを別に定める。

第４章　会　　計

第17条　本会の経費は会費，賛助会費，寄附金または補助金等によって支弁する。

第18条　会費は当分の間年額7,000円とし，毎年３月末までに次年度の会費を納入すべきものとする。

第19条　本会の会計年度は毎年４月１日より始まり翌年３月31日で終わる。決算報告及び予算案は総会において承認及び審議決定される。

第５章　雑　　則

第20条　本会の会則の改正は総会において審議決定される。

Vol. 44, No. 2 July, 2000

THE SCIENCE OF READING

Published by **The Japan Reading Association**

President: Takashi Kuwabara **President-elect**: Hajime Narushima

EDITORS

Shinichi Ikeda Mamoru Kaneko Takahiko Sakamoto Yasuhiko Tsukada
Hajime Narushima Katsumi Tokuda James M. Furukawa Donald A. Leton

EDITORIAL ADVISORS

Shuntaro Arisawa Toshimichi Ishihara Yasuchika Imai Nobuko Uchida
Takashi Ezure Yoshitake Oshiro Michio Onishi Akira Okada
Norihiko Kitao Keiko Kuhara-Kojima Soichi Goto Kunio Kobayashi
Nobuyoshi Shikanai Kazuko Takagi Genichiro Fukawa Mariko Murai
Shozo Muraishi Yoshitsugu Mochizuki Jun Yamada Hideo Yorozuya

CONTENTS

Original Articles

The effects of second-language proficiency on text comprehension ····· MURAMOTO, Toshiaki ····· 43

On the narration in the story "Sangetsuki" ····· MATSUMOTO, Osamu ····· 51

A study on the readability of braille in active exploration: The recognition time for two-character combinations ··· SATO, Masaaki ····· 58

The effects of differences in regional area, generation and gender on the appropriateness of polite expressions in Japanese ····· MIYAOKA, Yayoi, TAMAOKA, Katsuo ····· 63

Translation

On reading (6) ····· GOODMAN, Ken, YOKOTA, Rayco (Translator) ····· 73

THE SCIENCE OF READING is published four times a year (with an occasional combined number) as a service to members of the Japan Reading Association. Membership in the Japan Reading Association is open to anyone interested in reading. Please send all applications for membership and queries to Takahiko Sakamoto, Japan Reading Association, Department of Japanese Language Education, School Education Center, University of Tsukuba, 3-29-1 Otsuka, Bunkyo, Tokyo 112-0012, Japan.

第44巻 第2号

〈通巻 第 172 号〉

平成12年7月1日 発行

会員頒布

編集 日本読書学会編集委員会
発行人 日本読書学会
発行所 日本読書学会

〒 112-0012 東京都文京区大塚3－29－1 筑波大学学校教育部国語教育研究室内 振替00160-8-3213番

印刷・勝美印刷株式会社

平成十二年七月一日発行（年四回発行）